

海國兵談



399.1  
K

No. 696



富士川文庫  
198

## 海國兵談序

今之所謂兵也者言用兵之理今又所謂武備也者備之事足也兵之屬於理備之屬於事時勢使然耳所謂武備也者攻守之見則亡論已論至乎其測區城廣狹山河險易古今異同人物強弱天度寒暄敵國大小遠近緩急利不利衰旺各從其權而制其宜徐謀豫虞必無者遺漏也而後其用爰備焉下營是也豫虞匪解講習之務益久益精研究周致無所不至雄武俠烈風不撓則丈夫無有反心化外懼伏而

莫或敢犯真如此而以至萬二也使人民永莫兵革  
亂離之苦者也可得而期矣業亦大也哉矣凡為臨  
時機備為太平業太平時武備不張則兵無所講兵  
理不明則武備無所張事理相待而已矣故

神祖開業以來昇平既久中外無事世之言兵者唯  
理之究享無所施今也實國家備于武之時哉而  
今之備之者徒談其理而不按其方卒不曰儀而忽  
乎講習流風漸移因循苟且其終歸廢弛使兵之與  
武備均屬空理可勝嘆耶亦猶兵革亂離間人情懈  
武備均屬空理可勝嘆耶亦猶兵革亂離間人情懈

于文學時勢使然耳兵為臨時機備為太平業太平  
時止備為屬於事舍事取理未見其可虽然時勢之  
使然也自非大勉強斷而不能及于此也予友林子  
平者慷慨之士也性怙澹寡欲心存大義真親族略  
多縉紳子平蔑視不為家酷好跋涉化邦域內經  
歷殆徧其縷櫛自處常如左兵革向藍縷櫛食草行  
露宿陶然而自適云賞憤然發志因序有年著書滿  
架皆言當世之策此編名曰海國兵談其意以為我  
國海國也要在備於海寇故以自為其論說確實激

如目覩真人傍採海外奇東古今來未嘗見聞者出  
之足以觀我國防禦之大方其所志可謂偉矣當今  
之也豫處匪鮮講習之勢益精益究周致無所不至  
則所謂以至萬世使人民永莫受兵革亂離之苦  
者其在乎斯歟其在乎斯歟

天明六丙午夏五月

笠臺 工藤珠卿 撰

海國兵談自序  
海國とは何謂ぞ曰北緯七十度四分半海に於  
國と謂ひテ御に海國とは海王初夢の御傳有ム唐  
宋の穿書乃至日本より古く傳承する流の洋  
品等からて外洋と知るハ日本ノ武術とハニシ  
先海事は外洋の事り易詫ナリ高麗を謂も有  
キ有り易一と云軍艦にて頂戴と云れ、  
日本道二三百里的遠海も一二日に走りあつたり  
之れ來易子譯り久九備と改名せし守護之又  
是を羅々と云、謂ソ四方皆大海の險ちあざれり事  
はざり少く之險と云て備に島多幸多幸

是れが黒門の口と云ふ武備外寇を防ぐ例と云ふ  
事多し歟ての急襲軍三千而外寇を防ぐか前  
以水戦二通り水戦の要は大銃にあり此ニツと號  
神威す軍口守御使正使にて唐山龍郭等  
比山廻し軍政の殊う所之と多き後陸續の  
事に力有り 大江医房と號くと極正成  
甲被二千の軍士甚軍比多人を殺すと于根  
元唐山の軍士と争ひて警古守一人を  
射へ皆脅脛流る軍隊の傳授と之海事湯  
及之而 事子一と多く之と争ひて  
以て今事子海事兵法を作りて水戦と

其開卷第一義に西事海事軍体の根柢成り  
故なり日本武備大成水戦と承一と云ふ事も  
又一つの心のよりその源をさへすと謂ふ唐山と今北  
唐山と地名の爲めに相違すと承らる先  
日和陶辟以来外國より至る熟達之軍は序より  
元の時代度々軍と仕事する御守弘忠軍  
只大軍以て御守一と云ふ事と紳介に  
まことに慶也事もなし此元君君北種より御守  
山と號す人有れば元の代に序山と北種と  
一脉にして少くも軍止事と御守と號く  
無馬と御守事もあらず 亂序と軍と仕事

一  
一年り早に至て、序以て時勢を考へる所、  
三代ハ元々は、必ず秦漢迄、六朝南北、唐宋、五代、  
宋、元、明、清、の洋に、如何也か。——唐の世に、屢々りんと  
征伐す。——之を、海路と、都下のると、洋に、あざれま  
互に、好んで、用ひる。——而して、侵、敵、は、友軍に、之  
く、子胡の、後、楊裕生、是、又、李衡、也。——而  
而、宋を滅。——乃ちより北移、蒙古以  
て、之を、元の、無馬、而、タタ、アリ、ハ、上に云  
ふく、原山北、北、一、御、に、御、て、之を、遣、回の、軍、上、軍  
馬、を、盡く、丘馬、と、出、了、將、心、得、り、う、手、也  
于、後、内、也、但、元を、滅、して、宋、を、再、也。

子政の、東夷、も、す、能、一、統、の、事、と、聞、け、り。此、代  
黑、卒、を、侵、掠、す、の、様、が、し、て、北、狩、の、大、敵、也。  
用、に、繫、抑、——か、遼、海、を、絶、く、京、こ、還、す  
毛、立、大、國、の、極、厥、胡、解、と、歸、れ、く、地、亨、く、入、海、に  
辟、易、——而、侵、伐、つ、る、除、う、る、——是、即、亦、韃、靼、  
チ、ル、之、康、起、以、來、唐、少、韃、靼、又、ハ、純、に、革、く、今  
ハ、弘、毅、一、統、——北、色、不、能、く、古、年、に、成、れ、り、此  
故、に、幸、之、無、馬、と、物、す、い、も、心、得、る、有、キ、ソ、康、熙  
雍、山、乾、降、之、之、名、文、義、剛、然、而、然、時、穆、  
達、——欲、康、熙、と、之、に、付、く、必、明、と、之、唐、山、と、之、  
事、あ、れ、矣、今、の、清、と、之、古、の、唐、山、に、譲、れ、ハ、也、也。

古の唐山に一信——武藝の少風と修業——  
修業——特欲も小ゆきと承り、勘定に移り行  
ぬ終小秋食貢夥、恨以身に唐山に移りて其  
に原の風儀も御に消滅——且又世より去藉次  
中日精々成り得たり。物は往來も無事モリ  
人心も力も餘省すれど今ハ多く日本  
の油頭足弱御自ら乞う。情も窮屈也。憶美くは  
慈後清きのうきの意の時也。且元より  
古樂也と思ひ。今て如何ぞ。多云意を起す  
事。了了非<sup>レ</sup>。子叶へかくして貪欲を辛  
とすれ、日をめに致し。當時懷古兵馬信方

此多を持は日本へ哉。威も亦可思是内之の唐山  
山と云國と譯之又乞比ハ歐羅巴の莫斯哥未益  
重慶。重慶か遠く。鞍韁の少也と修業  
姑比ハ室韋の地名を署。東又限加模西葛  
杜加<sup>即カムサカラ</sup>。近押領——今、御に加模西葛社  
加模<sup>カモ</sup>。奉此<sup>シテ</sup>右多<sup>シ</sup>國<sup>カモ</sup>。其處に又西に  
爾<sup>ル</sup>。ハ班夷國の東多<sup>シ</sup>。余被<sup>シ</sup>を告入<sup>シ</sup>。穢<sup>シ</sup>  
有<sup>リ</sup>。ヒテ呼乃<sup>シ</sup>。既而和<sup>シ</sup>。年知<sup>シ</sup>。莫斯哥東亞  
多<sup>シ</sup>。加模西葛社<sup>モ</sup>。遣<sup>シ</sup>。道<sup>シ</sup>。高<sup>シ</sup>。傑<sup>ハ</sup>。ヨシマヨリ  
ツアラタルハシ。ベシコウト云志。加模西葛社<sup>モ</sup>  
船<sup>モ</sup>。奉<sup>シ</sup>。日<sup>シ</sup>。御<sup>シ</sup>。港<sup>シ</sup>。下<sup>シ</sup>。魏<sup>モ</sup>。

予原と斗ふた日本を過半多矣。以氣  
事なり。船中佐藤國にかゝりてハリ有江省  
合は蘭之人、過よかと強、主に日本省も亦之  
是等の事も、根より忘る。是ニ海國也。  
故之不る。又、船乗の人の嚮轉吟者も  
心あり。不思議之う事も、如油井の作と唐  
山の時勢とと赤一擇了了し。又一つの心は  
方々、毛利と少川徳郎は、而して文武の  
兩全無生無死を欲。前後、徳兵も  
紀ハ野。之を終へて元本無も山巻之母を死生  
在て力保。其の上、又か之輩、是の邊に

之猶豫して一方の兵衆をそれへ而令ひ立て  
即ち又兩軍の道を國より擇候事  
うち概と論ずるにりかへ主軍立少將合  
兵弱と之より従事か。只國若前  
兵の雪まに位を令と捨て敵と梓く事と  
争ふ戰法とする。左子洋もいすとこれ  
は相手方軍の位を為す。右子  
理と法とを立てる。謀斗多機事を半一  
年するゆゑを軍主の堂をされよ血戰に即  
まへ主將是を多め率ひ日和唐山西國の軍記  
を讀く時心を纏純知。其事小此

治界を主に海面沿岸諸守り人臺灣へ押付て  
阿蘭陀アラントセモテルセモテルと捨て仕事する  
事水中十手把ハシの活臺被ハサウエる事生す  
此處島の主彼唐人ハタケイノン千人後臺也  
札と為す。たゞ書臺三十人。諸事今と  
美也。而して即時に卒一人討破。擅能  
工神臺を數々冲れり。母時度ムチドも手續晴  
負を為て彼禹ハカの力能比ヒコヒ卒と親  
傳ハタハタ。禹雖異色ヒトツコロ國父丈火番ヒツカバを寺  
の制ヒツ以精ヒツ。而船軍に長ヒツ。而そし其

國財既少々難治く和親すゝも同玉政改革  
を只相互に化かと侵掠へ已く有り  
する事と世の紳士を變る同玉中  
同士軍をせざるゝ其ノ不廉山學の金力及  
て其ノ兵と於る其ノ軍情を令得主之幅  
機を多きは天下に播りす。而り少  
晦多の徳と今之清ハ古ハ唐に優一瓦タ草  
にあらざる御承諾と三井各務園の特徴に別  
の如きを説く日半前兵家又東莞の事と其  
事務の伏せしの軍事免生も皆度の書に  
辛く工文を手て自知其事の流に漏る

都の海軍は海國の兵制有事軍と本筋軍を有する  
事少ず殆ど是を主とする深く要る所あり  
而向切に考へ外事とは何事かと以てよし  
事の常の人へ外事へかす事の僅書りより  
以て直情傳行ふ精良の御教訓と僅と  
顧みるベシヨウカ事と神事と外寇  
の事、名を経て外事の行は書にて却ち海  
國の吁要人の御傳へやうすりと事と内合  
の如く小吉と云ふと御事と御見聞と不  
を莫多集一姓もと作事事是者少く  
徳と力量位と有りて患ひに海國と

以すゆゑのすはくはく書かて潛念の罪をふ  
過事とあらがひてよ人をへ寄れ言成  
ハのち是を言ふ徳と位とと重計思書  
と作意して言と商を危す。而く  
書成く以く改とす先とも少子ゆく人文  
敏と是れもと寫り成句と書。章觀者  
讀法に苦らずと為り。此は士紳と  
此に用く文以戰法を以洞色。或以文革  
詩體。其間れども詩を吟。文即相  
兼く。多精に句率と博。時之邦多の  
をあ。酒もと経済する。一冊書了。

竊に是を日本本傳と云ふ。羅馬人を  
考え文の初字を以て不羣と宝。セラモリ  
書。時天保六年丙午夏。伊藤林屋  
自序

海國兵錄目錄

第一卷

第二卷

第三卷

第四卷

第五卷

第六卷

第七卷

第八卷

第九卷

第十卷

水戰

陸戰

軍法物見

戰畧

夜軍

摺士一騎隊

人數組人數級

抑前 踐方佈立高陣野陣

器械并步騎荷負糧米

地動城刻

第十一卷

城責攻具

第十二卷

壇城守見下

第十三卷

操練

第十四卷

武士之本體并有別人收錄附制文  
後卷之大卷

第十五卷

馬、銅、兵、石、箭、騎射之章

第十六卷

畧書 大尾

和卷之十卷止水陸戰闘車と通す  
ト者亦文武を兼く國家と經海ノ一念とは  
兵と是の事と多くある心得ノ一兵の心  
テト大満足方にれてユヌト

海國兵修第一卷

仙臺林子平述

水戰

海軍武備ハ海道に有り海道の兵法ハ水戰に  
有り水戰の要ハ大統に有り是海國自古の兵  
制なり之故に此篇を以開卷第一義に奉る事  
は意の外常の兵と口ひ難い非ずと  
知之

○是年冬月は人心弛む人心弛時は丸と立す  
此事和漢古今の通病也是とあらと倒体  
と云甚矣武ハ久とお無事かの事も多有り  
体ハ徳に非くす事の多ひ徳之事立する相に

物と傳へ無と云也。商色又各國にく異國船  
の入津ハ長崎に限る。事體も別メ漁人船  
をある事ハ斐々と御車となり。宣モ半  
に報暖する人と立ト。既古八薩ノハ内坊の津  
筑前ノ轉多此おみ年戸 扇ほの兵庫和泉眾  
御氣の教習少く黑ノ國般入は。多く御と敵  
物と高ひたる車板多々有リ是自序にも云  
て。海國より至る所國の浦つも心に住セテ  
能手者れる車板れい東國と御見え具ら  
沖野ハ御子れすよろしく、因、私思つて為世長崎  
の港口にて坐矢見と役く被成張り。日

本国中東西南北と而偏處長崎の港口ゆき  
御交車 海國御船のちを意知ト。又其事  
本多ト。御主之御事也非す今より 割利交を定  
ム漸くに傳うれ五年にして日本ノ西海  
漁場にて御事也。御船す。其船す。時ハ大漁と  
仰せ。云方五千里の大漁を築立たし  
定。愈。役あす。

○竊に憶へ。家以長崎に。亂氣に石火矢の伎  
方々。都々安房相模の海港に。今傳す。此

事甚る高く知に之の江戸又有年橋より唐河  
蘭淀迄境有水路水鄉と云に傳す  
一々長崎に北之傳い何うか 少子を見と  
之くやは安房相模の兩國に該處を主く  
入海北瀬戸に屬す之傳と役友車守 日  
本丸御舟に傳る車は先此港口と以爲居  
及 乎 是海國却傳中又軒要廠也  
故ニ又言之忌諱と云顧 乎又以謂之小  
也 乎又忠也是並に移支羅と云併  
之傳く也 ○ 水路と違くすにすには  
艦船の制作に工夫を盡す 乎次水主

楫古に軍艦の練練と號可教乎頃ハ無兵士に  
水築水馬楫古のえりを教乎 乎水戰  
の三肝要人尚委う、事以下に與す所のみ武  
備伎大學校の圖と見え矣乎 ○ 黒國  
御傳古乎海寇と防禦すを役者も  
其ハ摩山にて倭寇と名けて日本海の海賊と  
號く仕形乎 乎甚手に車されハ是と書  
國古く黑船と號く多手と役人御  
古ほく外寇と防み御へ是れより車也之  
を大成役ハ黒國古手御御也并吞も之  
為にあれ車也之仕形手大仕也

もつこ主大仕事と辟く所を伊勢の是  
ち仕事に而て、而て車輿の主は魚の  
船とたと記す海色に傳く墨の國の大仕事と  
碎く角をもとらとすて、先墨國船の作及  
堅成洋を奉る、又と多く御の廣モ  
保りと也す。○あ時日主へ多々墨國船  
ハ唐山阿蘭陀と胡解號號置置等ヤ北  
方に坂夷船乃れも未、而邦へ至れの事ふ  
安逸之車乃ど而て是に見小船し  
同北方に加模西葛杜加即カムサの主船荷り是又  
ありやへふ事と云はれ、既に自序小言

加模西葛杜加のヘシコロウ黒船に主と日本を廻見

一物もあら、而れば一圓に車の車也。も  
猶も船、和蘭船の類か、而城の如堅實玉  
極の船と呼ぶて、此舟車の程も、は先常  
乗及岸下總が木れ港口へ可あかと思つ  
タ、海路行邊なり、可あらむ也。○唐山  
セ船ハ長大され、其創修の法物子主子船皆實  
也、而元來唐人船と呼べ、板と云ひ、而  
板と云ふく、板に余水を添り、用以  
てす迄の車と云ひ、其創修の法物子主子

立すのみと碎くに大流火弩といふ  
火薬く碎く追羅朝碎く疏羅等此  
般ハ大槻角山船の割合に倣くを作  
之を蘇羅にて御とも少すれハ唐山の船  
又一例碎く不有り阿蘭陀及歐羅  
巴諸國の般うそ割作多是實廣大なり  
時れうち大流に有られハ碎本云能元  
西洋船に似く冰城と云唐人の板と云ヒ  
天地島の跡の透人既に冰峰と云上手制  
作の壁室唐方と云ひ有るト  
又木板と云ひ別名木舟と云ウ船の骨

錨を作り表板と張りあわす。又、本の  
長冬布を首尾に引く。鉛遠心連る事。  
此積と之冷の極めて密接打と密不打と  
貫通橋に適合し仕事へ一室隙の所い  
重壓ありとて又亦重の水に浸。更に悪く  
紛らしく包く水を一端。船のあく  
定めとし船の長サ十六丈 濶と車  
四丈 游走車二丈五十六尺。帆柱四車を建  
中央の右柱を車十九丈四尺、帆十七枚  
十三を掛く。船内六枚處に車三枚は張り付く  
所にて窓を設く。物と全く一體とな

下ノ方九尺高キリ 今度年歲子 馬  
場ノトモト 重防りの事首尾トモ  
方三万半の窓三十金にと開く窓妙に  
う鏡と仕事ナシ無之モ云流之貫目ナム  
入居殊ニ手船甚時ニ 一舟帆  
を繕れハ此舟帆スルリと只船の西擣に敵  
有れハ西擣のち流十二位と一舟十二  
順に流終局舟内國と以て船工に食食  
船工擣を繕く船と之急乃擣と西擣  
の如く血れハ又東擣のち流と放方へ而く  
一舟十二位順に流すと毛藻に船の如

たる西擣十二位と云ふ あると從  
事ととすりハ窓即ち船出 たる大統一船  
のよき船と筒のすじみまく馬車に跨り  
居くともえり葉ハ紙の袋にて袋の傍に  
くとも既而擣十二位と云ふ 既は  
布船と神よ さて西擣を歎一舟  
をもとめ立候向到 一舟角  
等地企立ふ所に取す水瓶に用く利否  
とひせ船と能くあく新てえて居る  
處すとひが大船に遇たるが 一舟取立  
中も立常の立筒とく壁すとめられ

又和蘭人ハセノハセノキスツツカトニ  
チ理亞セラ却波志セラシトリムニ木野キノの事モノ  
其船ヒメノモテナシヌ如シテ度大母タマシマミカ  
多巧氣神タカシミツクニ艦カミツクニ多タカシ千書チシモテテタカシ不  
署シグと名シムトシム右シムの事モノ即ち是シテ御神ミツクニの前  
方事シムあれシム之シテ合シテと碑ヒムニ支シテと多タカシ其事  
油國オイシキモ一シテの神ミツクニ威ミツクニ能心ミツクニと用シム  
○少シムニテナシ和蘭尼ハセノ船カミツクニ仕無シム主シム北  
方統シム此シテ不文シム云シム一シテ皆シム主シムの船カミツクニと相  
互シテ降シム多タカシ里シムあれシム此シテ大統シムの刻シム久シム微シム  
半シム宣シム之シテ相シテをシム易シム碑ヒトシム萬承申シム也

少シム和蘭尼ハセノ船カミツクニ入シム千シム流シムの刻シム久シム量シム  
則シテ書シム丁シム高シム制シム也シム○箇シムよ長シムサ八シム尺シム○箇シム  
古シテ箇シムえシム小シム精シム降シム一シテ尺シム多タカシ持シムの不シム掌シム  
にシテちく筆シム一シテ方シム新シム持シム後シム一シテ手シム五シム寸シム○箇シムよ常シム口シム五シム寸シム四シム寸シム一シテ骨シム膏シム以シム取シム後シム二シム十九シム下シム三シム金シム多タカシ持シム後シム引シム手シム五シム寸シム二シム日シム半シム下シム○大シム箇シムよ因シム也シム紀シム又

阿蘭陀船在

方鏡之圖

カタシハシ  
と云阿蘭陀ガ

唐山にて拂狼機

守宿天

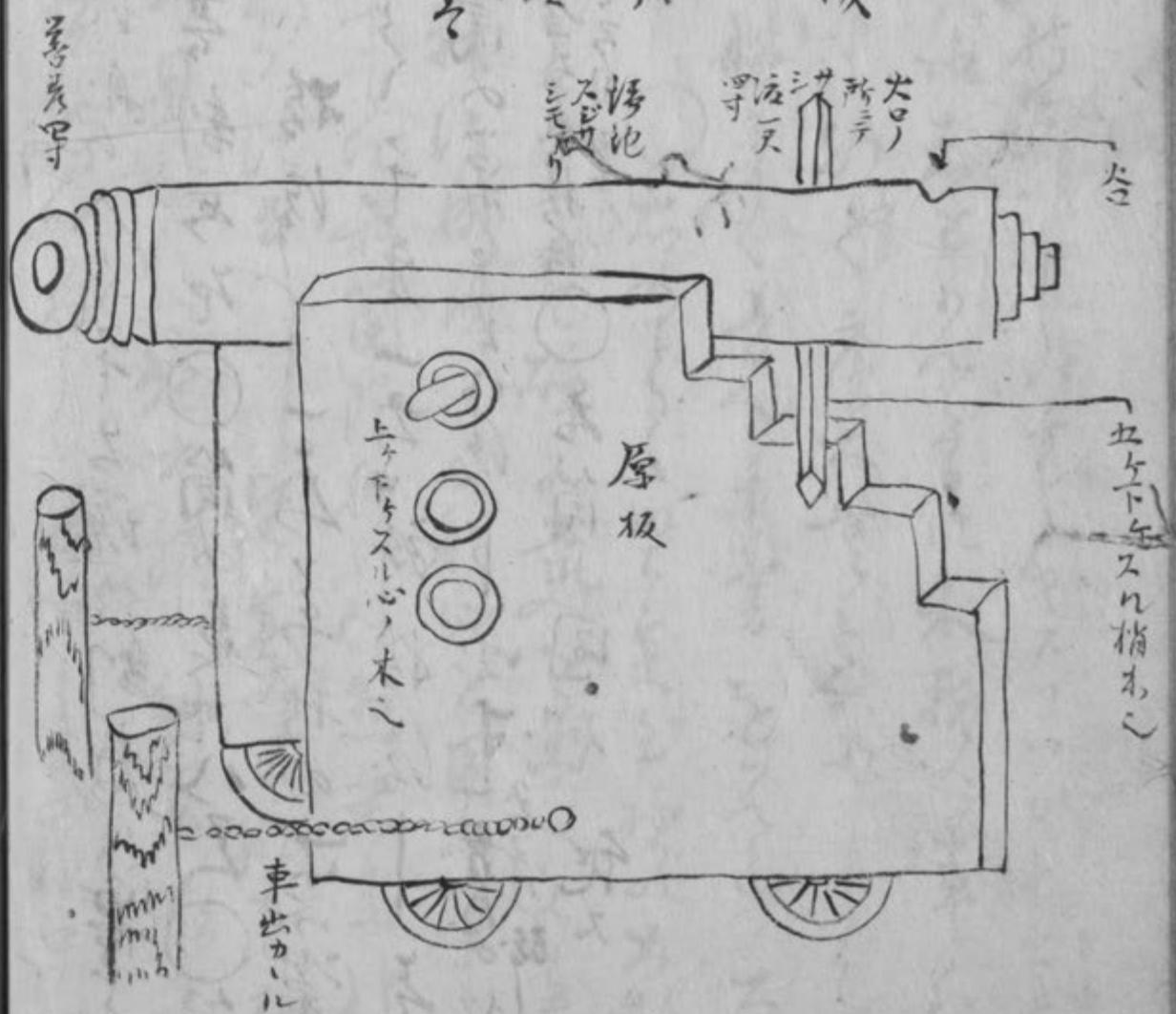
所テ

シケヌ馬長ガハ

又余單ロ持渡

内法四寸外法七寸

乃京



○右の割舟に倣て方鏡を作割  
ト市多ノ  
被皆室の船ともども心易碎  
ト況高山還  
羅木の魚船ハ一登はニ三船可碎  
○和蘭陀  
の統子を帆柱切云あぢり半割清舟  
ニツ相連く長五尺斗よ鉛頭と以テ二鏡子  
と繩子を拿す事  
○あら黒國の大  
船ハ艦榜一向に施羅  
只帆比之と稱す  
尼舟帆柱有れいモ羅卷て及く終ニ立  
事半舟を帆柱互に敵船帆柱折る事  
第一比側と有と聞及フ  
○もし大鏡を漏  
岸に傳知く事  
内多此山是には無

敵船とスカウトを示す船と打撃  
多魚の魚の水中も移るる友船へ水令  
○又の如き、右流と左岸に仕事する車の車  
御へど何と云ひ  
然に此右流とりゆ船は  
車入と發す必く船間を移す事あり  
鉄鍔の後船に付船の事  
○又、然に敵船  
陸の道をとお船を為し傳せられ、船にて仕事  
ノ橋岸地に仕事と用可り  
一貫圓内外の右角と左角に水戦に能す  
事を車に記せりニモ其の右角と  
施す事ある○右流と以て船と群くの佛

外國と通じて、税金を支へる流として、  
心事あり碑文、年月日不分明  
古事記より、古筒の制作甚く足りず、是故  
國の事に心附き之勤め、然し海國第一社  
御備令、了見之似たり。頗る、前文に云  
古流と號せ、制作一、二年の實を以て、  
奉じ、其の後、古筒の實を充て、  
余に追々多至る古筒の影制取中  
思ひも亦い難い。以て、是れ、其の用  
之禁海國の御傳ハ、斯くて、其方を用  
能あらず、古筒代にて居た也。新舊以北小

此後に制法を定め自然と貿易が盛り高法  
を統一する事の費用と肩書きの事と富士  
千度又小名の縁に至りては國土を彌漫  
場所に亘りて古簡便と子令法とかに  
如きを以て上に之へ所の先流を多様に移く  
定く制法トノリナリ。國中一也。而海濱之處  
立之と。日本承代の武備も三種五化と  
共に自己の控え立之事へ此先流の傳と西  
海岸に設立れりやく武備今之、想りし  
えり。○竊に嘗て日本國圖より之を  
年來其の流を海岸に立せ

角、拂り渡る二ツを合ひ竹の籠を首に、尾に  
透かさず、拂く可用土は肩に減らすと  
毛羽が成る。拂り渡らぬと



ニ火マリ有ル

○右葉代刻通の大概丸二枚方と用ひ端硝九日  
灰二日硫黄一两右の宋に之を薬茶とい考合竹筒中  
に盛因火行と刻え之出細刻く用引之又十二  
一丸法も而十三に一の法もあり丸ハ鉛と上とす次  
ハ清涼、後火石、木棟丸、砂石及火洞清の滌

を縫ふ。漆或膠と以て練染たる事とす。  
布とニ縫衣を用ひ又收身頃方にサニスサと  
切定く丸とす。布と二編衣と角之弱子若吉  
と通し船と傳を打にて。又イヌアヤ松等の堅子  
重きあると玉に造り瀬泥中に埋入用時衣はを  
乾く用カ。

か玉茶も寔に臨く急東に病く。今初に附くす  
まづ左半胸腰の漸くに制作。之が手の半筒方  
札と玉茶あり。左治左之。○右茶まん差と經  
くあく。損湯せうらむ。左茶安承中。リ  
元和年制の事とよく自發。

都の刺割。妙形に穿ても。竹名。洞器、  
古瓶に入く理也。

○古丸と以て古瓶と碎革ハ前条に既に詳  
く。以てハ乱片捧出。大名ト以て焼付と多  
別る。黑紙ハ雲鷹青を塗。灰付に古板鳥  
ぬ統。竹に根。有心丸。此古筒に地脚。ちぢり  
手制細と以て。縫之四寸の空丸を被。洞器奉行  
勢。手中に端立。反流十五度。度。反流。反  
接粗。又瓦蓋。二反。右。細。に。水糊。と。瀬  
玉。土。と。竹筒。中に。搞。固。又。竹。と。刻。く。反  
物。瀬。と。長。サ。二。斗。に。切。圓。袋。入。丸。也。と

四塊洞罐中に居空腹の如くち革と砒霜を入  
せし之大葉八兩罐と剝袋に八升  
繩と竹筒外而、漆布を張固又足之此至加  
減剝法甚ち辛人悉く其流氣の秘行方を  
御之と用ひ

空丸

遂に繩一寸を以て頭に引出

金の様に外を漆布を押す

ガタ丸と二二十一回に可也

ち解きも急焼器

かく形坐食之手と外寂の爲に處後嘔え  
事すと今にあらず曾とく少半度滅は今  
新に其海國之傳と奉る者多知可奉り  
其多不遇と云ふ事も似且剝絆と以ゆ  
仰又ハ粒壹百粒以て之を却て多化開  
人間を以率之沙參革子之奉。之を之理に  
當方にせず一定の今と之より奉るがれ主  
五世男抗國に早く開闢  
之五年余延年も之五年  
參之未國沙革唯豪傑有之之無此  
多と移々之文地理海路大と度量

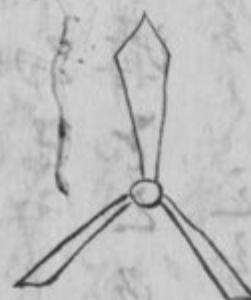
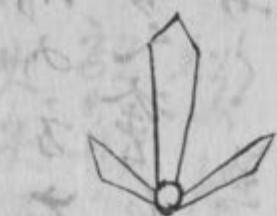
岸上に見立テ、然て相馬に炮火を向と  
侵掠下さる事の如き事より莫雄豪傑不  
至る。そをうとす事、あせり流みん情  
とあれり、御中歐羅色比徳國所作と奉  
すま國人殊に此情多々、多く在而  
とて、常に平日も氣をす忌利害と設  
計、千四人を懷く身内方に押頬  
す用兵、情へ今り革、歐羅巴と跋扈し  
て、沙う従活ハ、古事ありふれ国人情へ  
主事ハ路遠きを施奉、とひす被はれ  
る醫院已ハ、悉て内之身、引窮にゆき革  
革を年々少難觀る等歐羅巴人と交り、其を  
ト立リ、金親友少難觀の英雄豪傑多御法  
を更第、以ほとえり、侵掠の心の起彼等  
侵掠の心を起、日本へ來り往々く、海賊、  
を一、兵馬ハ多々、此時にあく候うくんは  
や何ぢんとす革を立、難事へ後世  
必度少難觀の地より日本と侵掠する革企と  
立す起、急事もかれ、是開闢、と革  
此後立たぬ事少ぬ事く、餘言す、世人窮に思  
へ、此後十数年に亘り、若く、實業者  
神経少ずれ、○治療病氣化簡く之れ

能く人多所之を一式制作して中年と保  
和され、其巻を重寶す。未論に手作  
矣。其巻遼く成る程乎。其種子作剤法  
云々され、改とひり事。之従手り是急遣て故  
也。其と用ふ事あらぬものにて食、竹の本  
の筋と用ひ。身もあらぬと、必ずしよ  
きと急もむるれ。○竹の本の筋はとんでも遠  
きに及すよし。久安用ふや環口立と名ふ  
の良木ノ割は生根とゆく割。二つに引割  
その中に之の入る御溝と持。あと、快當方。

○丸中の筋すり手割と云ふ。其筋を取す。其筋  
の繋ハ長サニ守ニテ。うもと入ア筋。此筋に常の筋  
炮に茶玉とカヨモク茶火を八分完入く。あと  
は全く。家圓の心を少間無に送り。繩を拉うり  
此や筋と十四支継筋之外、更に。般様に継  
セ。ゆき。其繩を以て。結因メ丸く。又。之を  
くへ。和本の内茶を所に。之く外。而。之を  
ちと。自持せ。あらん。板縫布。以能巻そ。高昇す  
る事。之を。圓形と。あら。わ筋の先と。あ固  
く。卷す。右に。お送り。今。圓茶。其筋

咽葉より小角の先迄古(古後既八十五便)の少筒  
喉嚨はく以も出でるはんをも碎り物と碎  
すりを此ととは初學て立(立)炮礮(砲)出とお是  
交くサ止角(角)炮葉(葉)の物と燒紙(紙)丸ハノとは  
筋筋(筋)色(色)手車(手車)立(立)燒(燒)子(子)炮礮大  
十(十)多(多)い此丸(丸)も手車(手車)立(立)  
筋筋(筋)長(長)サニ尺(尺)斗(斗)下(下)大(大)既(既)ハ九(九)寸(寸)筒(筒)に  
張(張)子(子)中(中)に竹(竹)にて(て)古(古)筋筋(筋)虫(虫)と入(入)子(子)  
竹(竹)は(は)手車(手車)立(立)筋筋(筋)筒(筒)に(に)老(老)ま(ま)れ(れ)一(一)概(概)に(に)大(大)既(既)  
手車(手車)立(立)筋筋(筋)筒(筒)に(に)入(入)子(子)道(道)虫(虫)と移(移)  
を(を)跨(跨)眼(眼)と(と)まれ(まれ)ハ(ハ)元(元)去(去)て(て)燒(燒)眼(眼)字(字)和(和)火(火)文  
に(に)一(一)筋筋(筋)筒(筒)に(に)手(手)清(清)明(明)と(と)筒(筒)え(え)る(る)わ(わ)

近(近)づ(づ)き(き)よ(よ)く(く)出(出)て(て)筒(筒)を(を)割(割)れ(れ)ハ(ハ)手(手)清(清)  
明(明)と(と)筒(筒)と(と)今(今)之(之)筒(筒)又(又)て(て)近(近)づ(づ)き(き)



筒(筒)の形

ちちの花(花)の中(中)一(一)別(別)に燒葉(葉)と(と)丸(丸)と(と)葉(葉)  
ハ(ハ)葉(葉)と(と)火(火)車(車)や(や)火(火)被(被)傳(傳)て(て)聞(聞)及(及)と(と)ち(ち)界(界)は  
上(上)火(火)炮(炮)のち(ち)葉(葉)を(を)始(始)め(め)大(大)サ(サ)に(に)丸(丸)筒(筒)  
立(立)て(て)は(は)る(る)難(難)い(い)事(事)も(も)古(古)統(統)の秘(秘)傳(傳)象(象)以(以)用(用)  
棒(棒)火(火)矢(矢)手(手)常(常)火(火)棒(棒)火(火)大(大)サ(サ)立(立)て(て)長(長)

三尺牛杖棒本棒に漆根を種く棒にて火樂を  
塗て木舟の手棒自之の所へよりとる  
燒之とも茶法○端筋五十日疏共十二日灰  
五日松脂四及樟脑之及薰共二支○右自  
左の又一方に端十日疏以及灰共之法○  
右無御の方右無御而居之法○  
棒に書人筆紙に棒に溝と之通穿之其茶と  
溝に寫く並附之厚く之ひりて之に往み  
拿にて外面と紙と以て張因之角玉棒  
羽と金車との箇先の製の如一此年  
二三十車高斯共之物一付之一物也

舟の横乃腰丈ハ船の方艤の際所一舟と之  
○船に立一炮煙火と三十枝アリ細と二尺  
斗子くそく丈人一ツ為持少船二艘に余一艘に  
持原放取之たるに是あり窮に送ちと移して  
一同に放取擲入舟一舟琳翁茶舟一  
○小棒火矢百枝を割めカクシムと一艘に二十枝  
死氣セテシ敵船火矢共に火矢を大根定同至平を  
あく五ヶ所にナシ舟を停焼立舟一舟外  
外燒付の法又ハ曲火矢縁玉狼烟花出室人  
仕方大筒象に教メ修立方々各御すよ  
ナモ初等火御八手倒立と用一

弓を以て矢を射多々御方り千法度あり  
射出 又船を仕事と射り何より射す  
張と張り矢をつゞく後口茶に火と射  
く發す○船に仕事と御船（押者）  
射少モ一弩に七八矢射多々一人ハ弦  
と張り一人ハ矢と身火と可持者有  
之まづの早矢及弓炮大矢に附る半も力  
を補と仕事と漕ぐ事○ちやんと御方り  
モノ法度を舟に乾く。紫萱と船に一立て  
多く積く總と以て四十五日船と船積  
二箇月を擧る。沖と澤の千石積を了る事  
二箇月を擧る。沖と澤の千石積を了る事

のりと船をとれとおもふ。右筒印。炮  
標的の所に立く。焼矢三十斤と備へてく。而  
前に造り成る丈又矢。是の矢は毫の  
先に柔らかく。中央に金魂と以て射て。結び  
相性堅密。諸矢の類と以て管と。又別  
之車と焼矢とす。小車文二行。燒矢は  
火矢頭  
トヒタ 小箭に入り。是と大筒。追大魂と。標  
的の所にて。結び合ひ。而て火矢。時別射と。也と。火  
矢と引とく。故名。車乃斗少く。小箭の追  
火へ。次後。く敵船の事にて。備合せ。所と自  
焉に把也。—— 造火能三字。右。板舟。放船。

押す。後を繰く弓矢の箭、主に紫  
に大移れはは大鳥、火矢の内と燃ゆる紫  
の火氣成る事多く、急駆船へ火核へ左舷  
幕、割居幕と車へ○西洋船一艘、朝吾  
く修金と矢を之等に火船へ別法あり、但  
火船制作ハ初よと、其火船とも早舟二  
艘引つ。小早の水兵一艇に十人より水取  
て火舟の舟尾に長サ一丈半のゆう、此頭  
を舟に二箇尾に二箇舟へ此四箇の頭より  
小火を入へ棒と手け棒より小火利成る  
根ヲ種ぬ此頭を舟の舟尾十車に二百箇の草  
に二箇舟を火船より三艘引れ連続し  
焼て敵船の禪のを不一押可半千討十人  
水兵の内二人、火舟と一頭く被燒、通所  
火棒を敵船の船板人を打て柱く、竊立煙檣  
へ窓から車あられ又二火八舟と、よく  
彼族幕とよてて、古歴小に火舟と物  
火舟を乗せ、幕へ至りて一火船海賊に當  
震弱、怪我安初と、火船も七八十脚方車  
移れ、余火箱、箭、火船へ、火船、火船  
之○船上、棒火失敗、櫓花の頭と云ふは追

手の中に打と響ます。又外耳は仕事も頗  
焼に接するまゝ燒る。是擇所の空方  
舟車中へ也氣通りぬ。千人舡の事へ即ち  
舟の氣をも何り寄多き而舟中へ也  
移り事多し。是燒付く角く○生燒  
の制作手札及燒付く塗灰石の條に於て見る様  
と看る。其とハ精緻と極く自ら  
所に立つ。是海國舟一此鐵網あれど等  
人ハ船艤網と名ふ者あり。又船艤網  
とハ被渾立つ。其と主に用ひる  
に為る事多し○又火船艤網ありと可。用

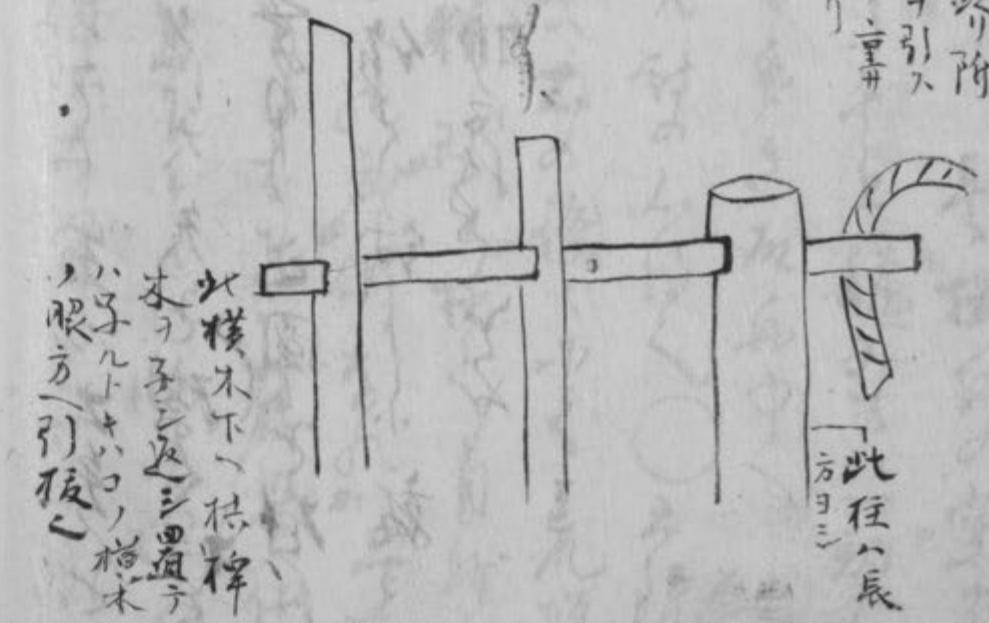
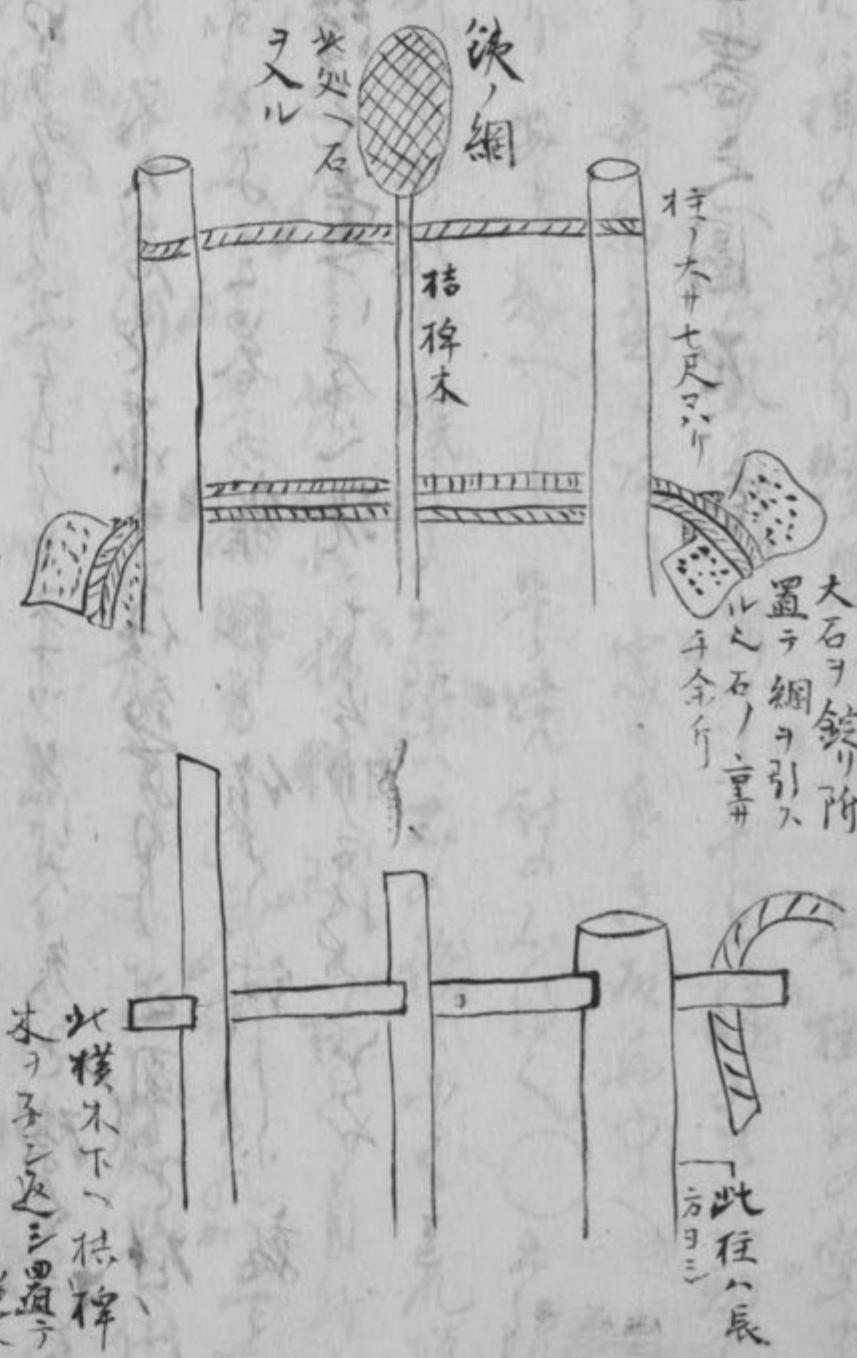
事多にあらゆるやうと云ふ事。又火船と  
謂はりかうり又トレイキスアツツに大矢と弓く。柱  
あり又大石と岩す。仕事あり。之國とたに  
出す。シムラ畠の難船と作く。紙。小瓶。木  
桶。運に及ぶ況て火船。

之器之圖考記

# 石彈之圖

大石ヲ鎌リ附  
ルニ石ノ事  
半金行

置テ網ヲ引ス

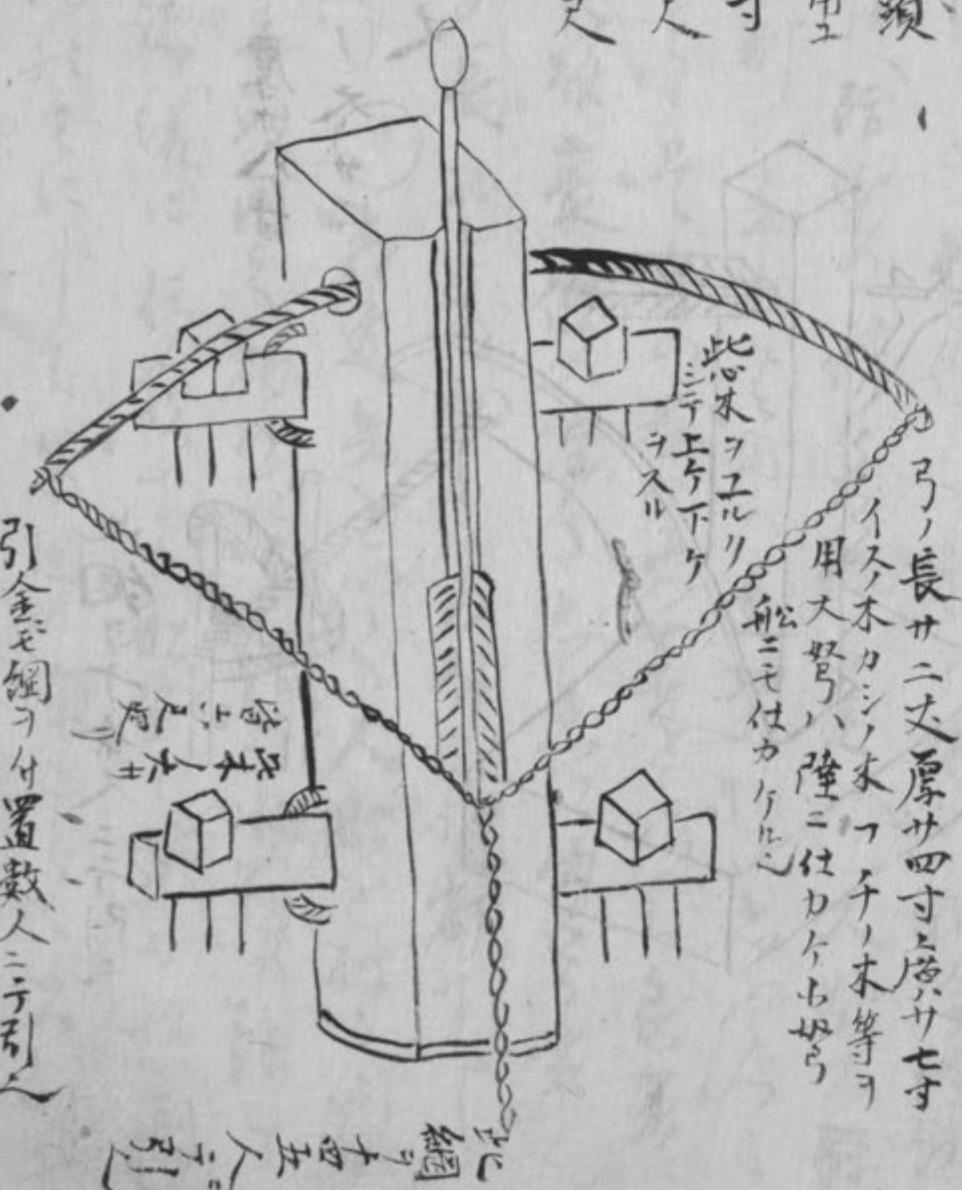


# 大弩之圖

碎ニハ鎌神頭  
ヲ用焼ニハ鎌ヲ用ユ  
ヘシ矢ノ太サ七寸  
迦リ長サハ九尺  
臺木ノ太サ二丈  
ニ尺五寸

弓ノ長サニ丈厚サ四寸と廣サ七寸  
イソ木カシノ木フチノ木等ヲ  
用大弩ハ隆ニ仕カケム  
船ニモ仕カケル

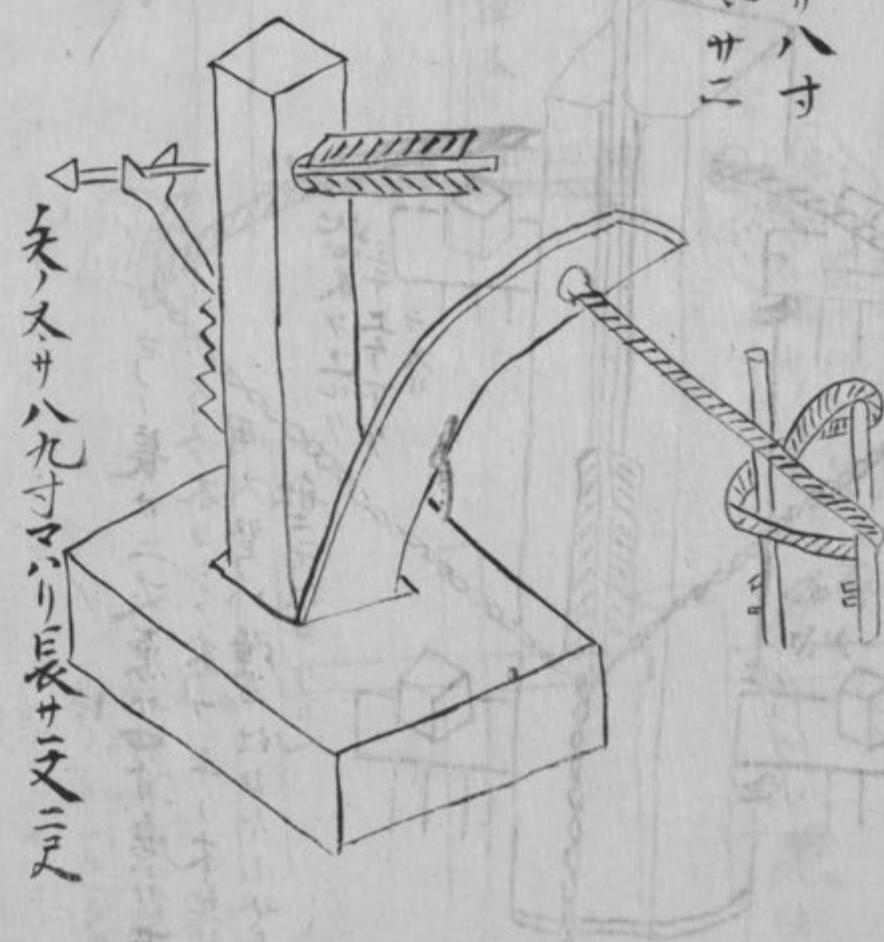
此木ヲユリリ  
テエテ下ケ  
ラスル



柱弓之圖

此綱三十金入三引

此彈キ木厚サ八寸  
廣ニ尺柱ノ太サニ  
尺高サニ丈



矢ノ太サ八九寸マリ長サ三丈

○蓋に及半を 碕半ハ 士に起ふ ち流大アリ。柱  
石除被付多シ 故修シ 予と補く 教論綴録  
ちは海事洋防備の術、も概の是 ○又鑑考駆  
行う事と割る事ハ、子房の並功の形にあらんも  
の事無しと見て多シ。墨ハ、内革モト織毛良第  
一。英雄豪傑の深す、多シ也。其事  
必遠遠の長也とあらざるあられ御すア  
御すアリ。○而道具と以て大船と破る例  
是正に紀早以因之セば、此は多様の冰裂の法と  
記載す。流流に伝授する船軍、只少般國  
士のみ無は北土にて、異國の傳(ト)ム者

種少助と以て佐藤の代に吏に令せられ  
我少助と以て里ノ事のち船を懸す例とぞし  
主と書類にてす例と補足記述へりと  
名く越後に山船同士の少林合戦と云々○少船  
はく黒玉船の紅葉と傳はば先年山和蘭  
れ大船の長サニサト名く黒玉船にす例と船  
す○大船とよべぬハ長サ二十丈兩様立  
写金多ニ又金之多船の割是よりうるより  
此船四五人を乗れ、船の中比少く水面  
に浮も出ず。あくまでも一ノ金、出之船を  
一大四半之浮ひ坐船一丈半出前○和蘭

長サニ丈メ木をもて人ぬに叶器とお亦れと  
竹子の清腹と名ト 腹の制トに圓す而  
阿蘭陀形へ御身の足間に北角をもと以テ後腰に  
もつと斜ケトモ 徒丸腹と般極に臨ケ  
もつと通ケトモトモ 下垂テ 通テリ 既くハモリ  
早く船生く也とくうや仕候也 佛ハ五之  
十人より人ありくモルハ多荔唐モカムキモタヒ  
ハ第ナサ人拿手小舟と二千艘ナホ様くろ御のモエ  
ヘ千艘と一ツに御手くモカモ一因モカムシ  
國に當モヘトモ古事記傳ナリ 部教傳  
傳承すト

## 鍊履



此奴ヲ以テ踵ヘ

クリサルニ

## 長柄ノ薦笛



小舟を多器と用ひ墨の圓形へ多びり少く  
一車ハ未成れも昌子常され未之時  
ハ少く一城に薦て外御也くよし  
之で安和古也身もかくく是る事無  
津うもえくと白疑

○或後にちのあぐりもと付にをそき一回に  
重ね、船中、而て、とまに、傳く、所為、船也、彼  
六小船二十艘も、十船、船也、御、御、  
毛攻也、船と況す下、船中、すを、可  
隔のあくち、を、も、御、御、御、御、御、  
八十艘も、早く、よの、御、御、御、御、

うせと御、く、被、れ、く、御、中、を、薦、く、  
千、輪、御、中、に、を、あ、れ、く、御、也、し、く、切、く、と、  
北、す、に、を、も、く、御、不、と、一、も、ど、り、御、も、け、合、  
御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、  
御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、

○中、船、肺、腫、の、病、と、積、千、船、を、サ、ニ、支、キ、  
船、立、役、と、建、く、有、之、四、人、寛、り、く、荷、仕、事、  
主、之、此、船、に、兵、士、六、十、人、と、多、く、十、船、と、一、  
細、と、之、一、艘、十、艘、船、也、之、一、件、少、く、往、來、  
往、少、く、處、而、使、れ、も、也、御、御、御、御、御、  
御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、

之群御氣れ也五之船中少能今  
ニ切立ト○小舟十四五艘に武士十五人ツ主  
之船、船に主一舟、諸属を主セ、主上に  
柄の縫をも備とあらんに於テ之船ノ群御氣  
島門にあらまよ其七单と行進、諸属を主  
を確絶、羣御氣セモ之舟、接連シ也

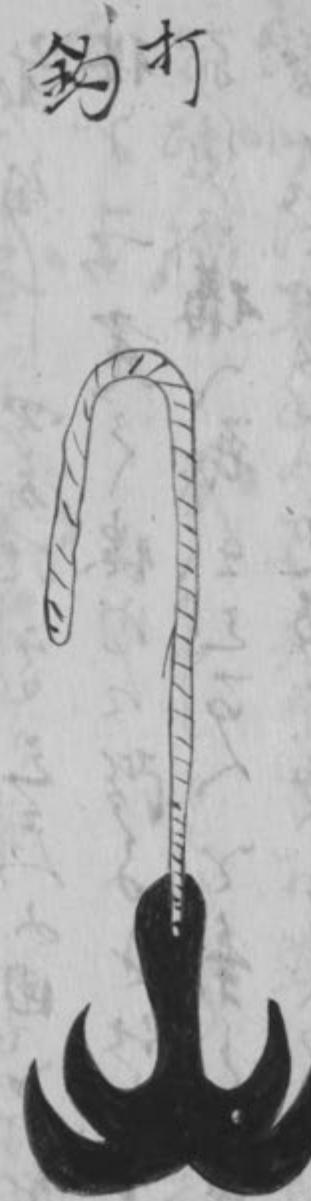
此卷に、筆者、年、字、五、之、所、  
にて、或に、又、口、外、署、年、人、號、外、而  
洋、以、外、無、不、據、之、冰、揚、之、卷、有、  
考、之、於、考、考、考、考、考、考、考、

○後手の少しありの流奥と角すを如

○長五十丈半、横七八丈に半に大船と云ふ。況異と用ひ者也。  
又斗櫓と波へ一櫓の高さ三丈に及ぶ者也。多  
少有り。四方に手をもじる圍を有す。此  
櫓を二つ建く。櫻内に階級と柱主と地盤也。し  
て其上に構へ。筋生三尺人と無く。或方板也。  
櫓を以て船と近接せ。敵船の押付く。弓矢火  
器長刀等比傍と多し。且近接く。舟身をも葉葉  
と互に接し。舟頭、舟佛、舟舷等を半  
方面。又一面蘭波流へ此船の時遅き者  
ち流と設ける。大船へ研取り。尋常

火大船と手合争ひ、船檻櫓互に交戦せり

五六尺ノリツリヲ用



打 鉤

此船は主に戰士をもつて

二百挺の槍(槍)甲(甲)

傍(傍)人(人)板子(板)

左(左)傷(傷)人(人)板子(板)

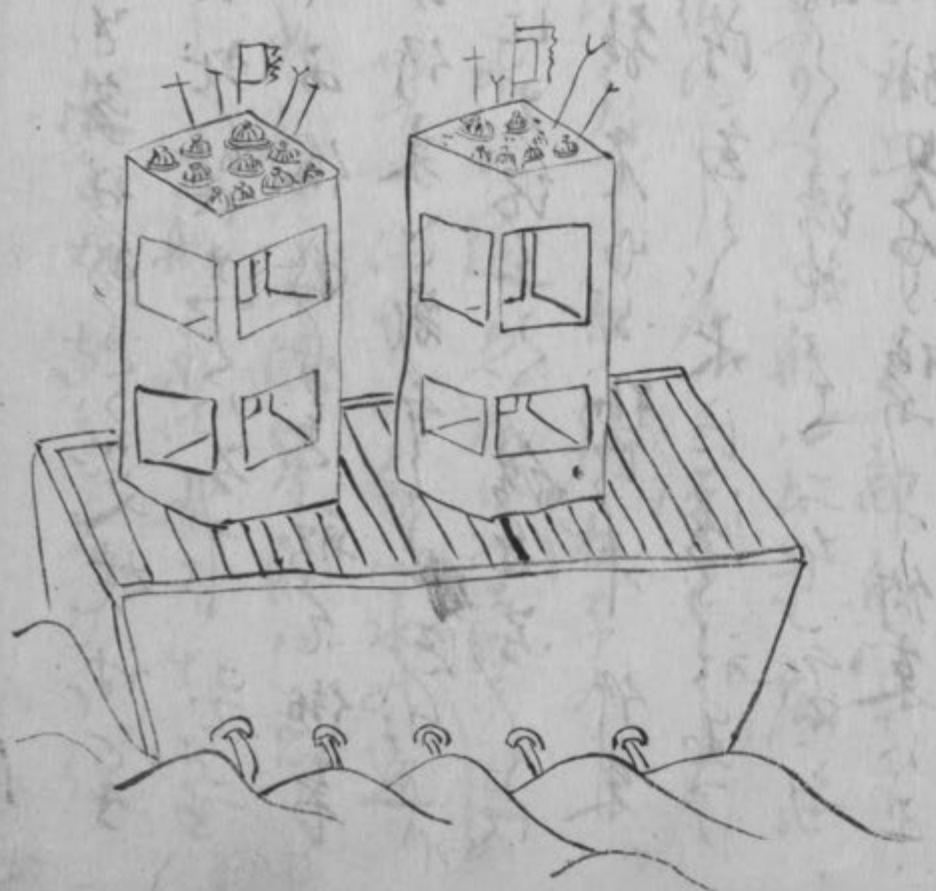
取(取)牛(牛)板子(板)に在(在)て

右(右)板子(板)ノ下(下)合(合)

易(易)致(致)シ

船(船)長(長)五十間

幅(幅)高(高)二丈



○竹東船方り 游砲を多仕放す又競射とす  
とする敵船付近より其船にて不可 也二  
十艘を二節 之の備前少主 船を備前  
多角子割ハ小船に行來と微子王  
かり行く四名主に之詔示く 繕手弓  
根子と仰く曰く 敵先也、相<sup>レ</sup> 也。 竹東  
三手 三手 仁所多く水に浮遊  
去手帆をねし物く 游砲を二矢 室井  
加小て内に四名主是モ相<sup>レ</sup> 竹東ハ三  
三構目而此敵無之を自詭少すす  
自由に走る。 力及ち蜀、韓子不也而く既  
第く めめうち船と拂<sup>シ</sup>ハ難<sup>シ</sup>と云ふ作索人  
三手と紫<sup>シ</sup>者舟と敵船と観念<sup>シ</sup>氣付<sup>シ</sup>テ然  
手續子等 舟中<sup>シ</sup>小石早<sup>シ</sup>之敵船<sup>シ</sup>も勿  
手續<sup>シ</sup>の傷<sup>シ</sup>有<sup>リ</sup> 一取<sup>ハ</sup>去<sup>シ</sup>定<sup>シ</sup>庵<sup>ニ</sup>  
一<sup>ト</sup>水<sup>ヒ</sup>此<sup>ノ</sup>身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>一<sup>度</sup>と至<sup>シ</sup>  
覆<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>火<sup>炎</sup>あらばれ<sup>シ</sup> 一<sup>タ</sup>身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>下<sup>ト</sup>  
とつこうも 仕切<sup>シ</sup>一<sup>タ</sup>水<sup>ヒ</sup>の通<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>上<sup>ト</sup>  
身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>一<sup>タ</sup>水<sup>ヒ</sup>の通<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>上<sup>ト</sup>  
身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>一<sup>タ</sup>水<sup>ヒ</sup>の通<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>上<sup>ト</sup>  
身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>一<sup>タ</sup>水<sup>ヒ</sup>の通<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>上<sup>ト</sup>  
身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>一<sup>タ</sup>水<sup>ヒ</sup>の通<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>上<sup>ト</sup>  
身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>一<sup>タ</sup>水<sup>ヒ</sup>の通<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>上<sup>ト</sup>  
身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>一<sup>タ</sup>水<sup>ヒ</sup>の通<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup>拂<sup>シ</sup>波<sup>シ</sup>上<sup>ト</sup>

來北瀉漫、船にて燒けよ野と、彈竹東  
半くす。内曲ナヒム為之船也。此船も  
火船也。而て大汎此時内シテ、往無事也。  
主制作兵衛也。半ハ能擇縛也。甚所  
所に引く。

○船々くと江に往来と厚く。はる  
圓の水と橋

○帆一舟に十五六箇

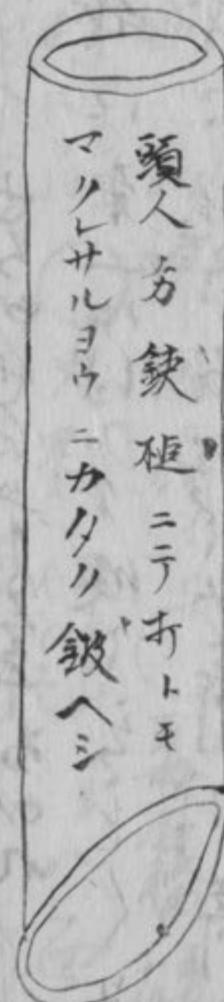


○かく教導、主事も大船とが付く。實も甚  
程立つて精妙に造り。但何れも敵船  
より大船と打並く。主事も甚  
大船也。遙か遠くを遙に見  
以て離れ去る時、舟は太らる。既定と云ふ。年々  
敵船の降り柳生。時日よりへと大船とや車  
いかる。或うして主事も。○か教導の備子  
多ハ夜討にす。時日にて因て晝と遙具  
とす。それも日にはえひ。と云ふ。故船も。既に  
主事も。はあき。或事も。すに取れ。其事に

夜既勦にすとすとすり ○ 夜討ハシマ  
首尾ハシマうち船へ船入たければそらかの  
入船中 働くハシマ 亂るにて羅士敵船  
へおれハシマ 稲ハシマ まくお相と物  
敵船の中と四手作戦ハシマ 今後ハシマ  
義士四十人余の船ハシマ 水主十人半十  
敵船へ乗ハシマ 義士舉ハシマ おせんと水主  
の内五人、ハシマ 乗るの役立て暴ハシマ 二文金此  
形物と一船に十人つ用意せしく義士敵  
舟ハシマ 乗ハシマ と先ハシマ は又、ハシマ 稲傍ハシマ と搭ハシマ く  
波長ハシマ お相へ出をね  
とえ八丈程の敵船焉ハシマ 船中と見  
すや 一般の小船ハシマ お車宛ハシマ おとく十  
艘ハシマ 五十半邊ハシマ お敵船中は居ちゆ  
白痴ハシマ 駆ハシマ おとく一時の哨ハシマ とあすせ  
半ハシマ お相と遊ハシマ て 義士と叫ハシマ 十  
艘ハシマ おれ知ハシマ 初に敵ハシマ お走ハシマ と仰ハシマ お君ハシマ お  
お走ハシマ の小舟ハシマ おとく編ハシマ 十 ○ 少舟  
数艘ハシマ 水ハシマ 勒ハシマ 連ハシマ 十人とお車ハシマ お敵船ハシマ お車ハシマ 実ハシマ と實ハシマ  
水ハシマ と入ハシマ ひし利ハシマ す

桶々瓢を頬當にあらと備えり頬の少流作  
に爲ト。而旨鑿も既被そぞれ也。故  
船へ寄り手てよみ及ばず水底へ往旨鑿  
をすと。既に船底板と當て船中へ  
氷の入時、筒鑿を頬へまとあく竈へ  
木代入の所と吸力發して船身より一寸  
湧過斗立くよく近乞之。而一船に冰  
珠二十人手く十艘と積ム。土艘と  
石艘と。是安く冰縫ぬれ悪く穴で漏  
る。仰氣ハニヨルと空氣。又河井大  
船主ハ急沈下。而澤の協賛先制也  
鑿れ形をのと。

長サ一尺立寸筒鑿



頭人方鍊組ニテホトモ  
マクレサルヨウニカタリ鍊ヘシ

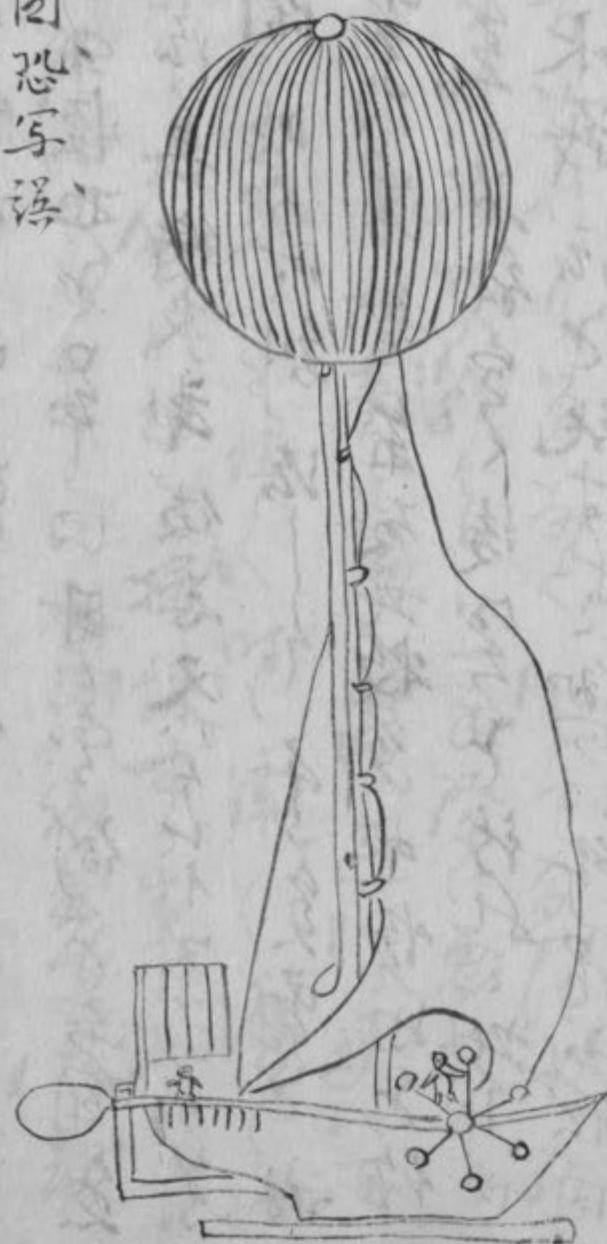
○支那経條ハ秋小艇とノ異國のち艇と種名  
御之上ア一役ハ能教諭渡據ナム遠

く歐羅巴へ押送りとす。後れとハシラカウ  
況遠外國へ來れり黑國般ノ若無  
シ都のうく下坡縫あられハ又復室清  
氣ト ゆうゆせんす年若れ ○ 黑國  
人ニ致に東一筋ナ吸ひ之トシテ  
ハ血氣に飽きる能シム奇効奇巧を以  
て有氣と奉上奉と節とす年少より  
曰士ハ若き時より年事あれども主事と云  
是人ハ被奇効にて年事くされ今宜乎脇  
を奪れ喉病と年より而くのみ前とす  
血氣弱 ありあり少面少友の少事キ也

家事事にて多奇効奇法ばれま鐘にて  
其の用うる、如きれハ多奇効奇法  
也只一一向に切ととぞ一めし無  
一必と奇術の仕事てのに喉下事  
うれ心所の多奇効と名は地 ○ 大  
矢 火薬火 ○ 神烟 烟之  
禽 教多火也 中天に火 ○ 火薬 教多火也 地と云ふ  
管 ○ 水底毫 工水底毫也 ○ 毒霧 霧天に  
管 ○ 毒固 古突悉古不中天と云り自油  
傳之氣て年り解と云事ナリノ外獨裁

経主事より此窓用あらじと之中にて此船引而  
當了、如火船あれども是又孟子にもありて  
若其年少と童僕炮を以て帆船の上に  
至る後と云候。——氣漏れて船底を下神と  
舟下。遂も怪也と見判する人、見と締  
く腰痛と生す。之が爲めに多大の心力と算て見  
等人物に忍びてうそを申すと神のまことに候  
諸軍にて。

理固古突悉吉不之圖



此圖恐写得

船の長サ袋又大サ方一丈帆柱の長サ

罗帆帆柱ハ既ノ張也

多數の性也と口に用ひし例と至爾然  
と制法無衡及制法志又ハケイヌソツク等  
に詳く闡候ハ制法一にて多寡量と俄  
ハ一ニテ多寡清々年有其牧多め性也を作  
く俄々年少無空く後即ちと行れミサト世  
の益水義法と號すと御に所謂少船曰  
太也小也合之○水上の義ハ陸地の事也候  
あ達也之先も既と云時ハ伊豆より近退自  
主也モ一歲ハ駆り也思ふ候は雖物事

舟に船と自由自在とすを謂ふれとす  
船と自由自在にする事ハ祥候稱也之  
也と制法精くすと年少僅休と稱  
すと者少也不勞也とて多て水義  
多也是時ハ陸地の義もハテモ降也思也  
在也是國にてハ水事と云く海也時要也  
事也和也軍士と傳ハ津浦也  
船と集て水義也起と擇篠す事也  
今ハ朝鮮にても多くに水害災事も多  
令無事也とす及テリ多事也事ハ差し  
合ひ事也ト○船使と云ふ者也

して軍船と出でます車の此種の家玉に  
拂ひ去り又山國水道を走りて車を出  
て京北車へ入ります。大暑と心得居て國  
士丸宮に退下。又車に依て高麗船  
軍用の時、大小船と車に寄りてモロコシと  
る車となり無事に宮に到ります。○軍船  
は大小船を組合す車は大ハ西無と車く  
御にあふをもととし。小ハ大船をゆく寄れ  
徳と車く。○右船や舟手利と稱す。  
時六大阪、京北、白金の小船と多處  
にあり、花石を佈設せ候よ。

多時ハ水物に利多事無ナ  
○樓船は  
主に舟及舟小舟ともに橋と用く事多也と防  
備にあつて、但樓船の舟外の自由航行にて  
すナ  
○朱穀、拉管、類船にて續  
大船に朱薪人麁ヒラと積にハ一束米一  
束薪と吸くに之積入  
○船此早緒、道在下  
敵に切れる事之  
○擇候ハ功事と擇  
ハ功同士也、而ハ至信く、海事率勿れ以爲  
の本因と定ナ  
既ハ論と呑手を付御子矣  
又西岸ハ論也、擇ハ得事、而另一同に呑手

大船と多船にて  
舟もナ  
○船標北定北而南半と  
用意す  
○移行の時用之  
○船にて、  
さる大旗、諸事車馬之類、  
に每く其上大風等、有事之日、  
一矢立ナ  
但持孔舟と樓船と、軍威と  
争ふ為、それ、旌旗、教と、主事もんと  
大將別船にて、主事、八心理舟、朱ナ  
合に氣ぐ、八艘、艦三四五挺、此三五く、余ハ悉得  
及ナリ  
○舳先と、船とに、又、氣もて、弓羽と  
槍や矢も、敵船に打落さすナ  
とく引

家等の時、鷹を捕ふを以て、又魚を食ふ  
一 打弓又圓ハ前に出す。○放ち船ハ  
行約三メートル、又タクシテ脚。一  
平口弓、船頭と船尾を合に、第2、腰、膀胱  
と瑞。一は水とも花道失ひ、傍代有  
一 ○ 小船に帆と蓬と大丸に毛子  
以、舟頭す。又之、船、序と毛子、水に引  
と毛子、蓬と之を引。○ 船、六天節、足  
の遼速、舟頭と之を割に因、遼速も毛子  
駆けも速にハ船、膀胱と増速に蓬と、  
船に用意せり。又哨と燐、又炮煙

火を敵艦、擲入へ。而敵、又火船  
へ擲入た時、此器は、敵返す。タモ  
毛子、八針、金く、放之、毛子、圓に

銳タモノ圖



○ 瓜比キスル時ハ、膀胱と三挺、船の左太  
に立く、絞げる時ハ、再覆らうと、外舟、舟楫  
の車ハ、立て、舟楫の右に、舟向く、精耕所  
に立つ。一 凑川下へ入る、敵に落く  
ぬく。一 先物見と遙く、陸地迄、穿

傍に貯ます。心平氣和する事あれ。○  
此船時船ともに呼般魂と名す。主事  
又修飾不急心余り。多く心を更張  
す。即ち種種之。○剥木行板マキハタ浦被  
煉石灰等般毎多用意す。舟と板  
炮仗等皆括ひてよく塞く。且つ各船  
具之剥木に綿或ラキハタ類とす。且し有事  
て大旨より般と打扱れば時事く此物  
を拵入る。至し板と附名灰尔て塗塞  
く。○是を一時の急難と放く。○糸  
水道中是此役を定むく。○

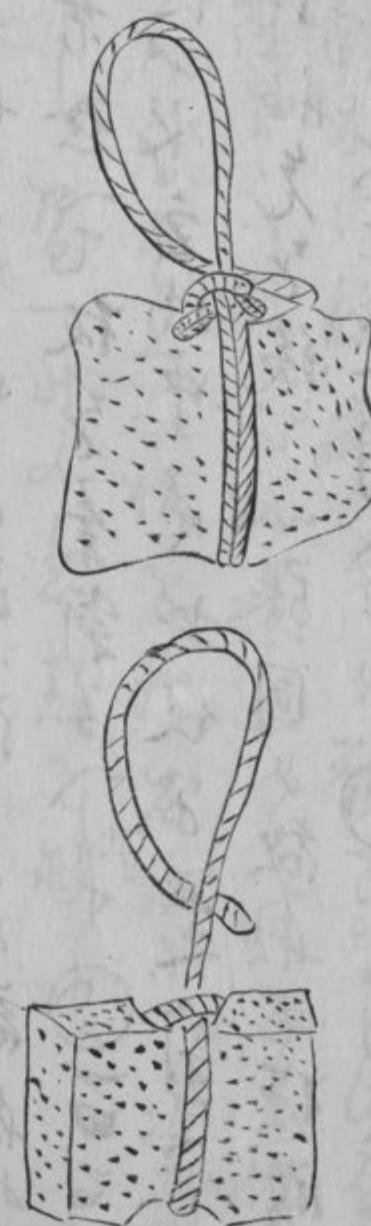
○般の艤装を疎と以疎小張りと敵般此役  
暖へ素急にて板を乗割る。○百石積  
此船に水立は中そ其役を定む。○  
○般の艤装を疎と以張因め敵般の種暖へ  
乗算く板を乘割る。○百石積般  
少水立ともに三十五人乗す。但  
脇脇八十挺も乗す。半より余は  
乗と折く。少す。半肺同士の荷物  
般八角波の上にて紹て支へ延車者あひ  
多は、穀と用夷八流車花火耗類と用

○

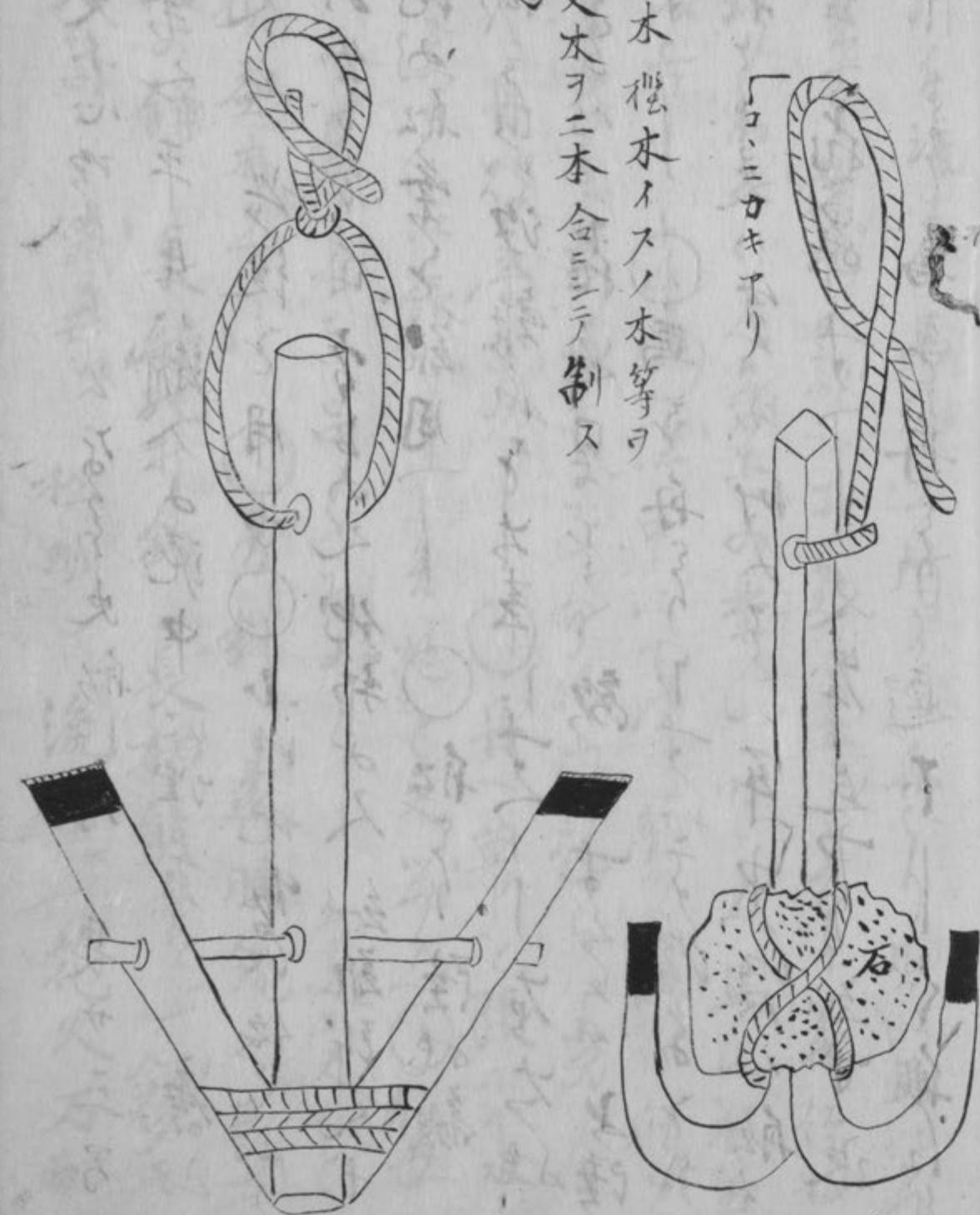
古多氣氣多氣多氣、後とゆく捨て  
に船海に渡と金牛と用意す。但緒後  
を切捨不する物も「了事」。石後本後と  
用之。——黒木多氣、其れとれ西多氣

石氣

### 石鉢之圖



### 木鉢



大小心吹子と云ひ多々帆船に用。ハ長サ三弓  
余之平生ハ潮入メ泥中に埋立テ唐山  
人多其役を用也○不比地盤に傍く内  
め出る方角有よ之化邦の人多難所也十  
地の船主と雖用○○船主陸北敵一  
孤舟い沙離れと大車にすく。左大蛇  
手毛毛石船邊具少く敵とすくうてト隣  
す十○馬と舟もり下すにて船主とお  
れ毛支ハ實ノ威叶ひ之年中以ハハ船主  
岸へ花屏す○又岸迄下り立す水  
中より馬と舟もり追下く舟に

引手流馬馬比立所多く舟もり車に馬に轡  
事多<sub>レ</sub>陸北の敵一モ多<sub>レ</sub>車有り義経拉  
サ<sub>レ</sub>馬も<sub>レ</sub>手不の業モ<sub>レ</sub>人馬に敷金  
致シ<sub>レ</sub>事○洋中にてゆ<sub>レ</sub>繫<sub>レ</sub>時ハ船と  
名も<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>事も<sub>レ</sub>ゆ<sub>レ</sub>内毛毛らハ空合  
く舟<sub>レ</sub>車も<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>○舟一幕と張<sub>レ</sub>水  
に後<sub>レ</sub>船<sub>レ</sub>張<sub>レ</sub>矢炮と文<sub>レ</sub>弓<sub>レ</sub>○船中  
に舟<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>品<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>毛<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>○<sub>レ</sub>文<sub>レ</sub>工<sub>レ</sub>夫<sub>レ</sub>と  
換<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>弓<sub>レ</sub>○方針遠眼鏡長  
柄<sub>レ</sub>鎗<sub>レ</sub>長繡地矛鈎長柄熊手鍔<sub>レ</sub>モ  
大筒弩弓松明流星花火石火大

火薬 石油類

乾柴

萱

中より外に燈明用薪火類は未だ及まず奉手より  
是より軍船納入於此處にて此より一ノ方法  
を數す小舟小排合の車一、此後と見え  
知り。○船体巡査見候とき先に坐し  
歎息形相を見や。」を四方比勘見由  
到り方よりうちれ勿論候候船而後其  
又ハ相等に用多旌旗花火火丸と拂全  
船に心無事。此而に舟船花火等不可有  
チ外縫織蓑具も三十五具竟有子才。

敵船万遠リハ船追見は。怪。近ハカタ  
リサテ敵船ト川寄セ年詰地情脇立半  
○船体八人數ハ多少と船数とに随事  
船体改修船定シツトモ一隻の船二十艘  
多く少く足可する革向外れ先候立改修  
二丸先年有候為候修年號小荷駆後  
修復在年字も然ヘ。候候事あリ  
ト。人數多少ト船數も同様あれ  
一。其木と定法とハ云々。幅狭の割に出  
入。但船と船との間ハ船多け除候  
石六箇。舟除却。如其事され空谷傳

船のまことに多可島海濱渡川口等極りに  
支支に船を間違ひにあつた。向をそれ、火  
船はあれあり。○欲船脇すに年々多。女  
目近代理筒と以て叙船脇脇船の模腹水に  
入多と打抜て船中人水のみに付す。十  
歩衝ハ小船哉。少時要此佛也。○大筒  
を放率。小船にて、船上叶次船に載。仕事  
仕事。船と見合く。初打  
魚子。○少小船。三月三十日一位。ツ仕  
事。○ゆえ。但百石積み船は五百日仕  
事と限ります。○前にも云

一般少く。荷物をせよ。云ハ一箇人、羌帖  
と乞。全船の法ハ或二三艘又ハ五六艘を一  
組として、追退難す。互に尋正ム仰と改  
メ。○駁船と見て、ハ云二云三に羌帖  
示約然手本と打撃。事板。○但、事板  
の船只無様。○一艘の船と、事板と、貨物と  
荷れ余とも。船にを味方。船二三艘より  
船を出下。○一艘の船並、事板云  
やく三五人。事板船を以て、船の乗人。水色  
十人。うち一人。船の長。之一船の車と  
司をも。○船頭者七五人。舟夫十人。八

十人六発砲十五人引ひて敵船を見し小崩く  
すすくらりと身を以て発砲する二人水三文。  
少物もとて身と捨て水汽然とすと可然  
敵船を引か爲す。壬午時残代威志丸延  
奥を傍く敵船へ乗船、壬午時残代威志丸延  
支す。右人一枚氣も聲無く、傷  
箭と定す。○敵船に乘船、水  
牛織と仰す。○平山の鐘淵即ち足尾  
と申す。腰掛舟等、蓬船と称す。上  
にも云ふ如く敵刀より身を出水色と同  
魚く付す。壬午時義士腰懸み車に轉じ  
以て火水と多残行教され、形而退  
等小苦手とよん此教水義大要法す。  
忘率。○ちねに腰を二所構等と  
巣因入多發射に、續砲を入航船に刻  
動を立刻一續砲十挺を入航して岸砲  
一人前之更名と爲敵船一通射する令文  
主事兼後砲十挺と名號。○敵く打下  
多發射敵船と主事。○但自余北洋軍艦  
去る船へまことに炮撃する事勿れ。敵  
火足切く此御とノイ敵と射す。

和教役に到りて、自ら清めを主事の仰せ  
トヨモリ船頭也以爲之。船櫓は割ハ、右半  
五十石船の形也。少い船と送る所より  
ナリ。○ち船に小舟其等と相交して往御全  
太以觀取と破少以人を脳。○之觀取と  
希カシナリ。○形櫓に少捕と移く仕込  
敵船を押すて敵船頭。○少捕ハ陶器を  
うちやくもと希カシナリ。○少捕ハ陶器を  
擲入れて碎く事也。○ち船に石と  
瓶ぐれ種事く自多ま少船一葉也く脳く  
○ち船此時、前後左右此抑尽し。

是ノ下、破綻あつたと、ハアハア聲也。

（神斬）軍車に奉乞、乃に於ハ至松  
川罪也。○船も陸へ至く上敷薪草木  
地用と申すに、船方多き事と多く行年  
少海内船頭役、一時に限る。至る  
す。○船方の見船が西に地保  
を急ぎ車。あれ急ぎ船の車。○恐意在  
止も。○嘗て北船と難船。即ち櫓の上摩  
されとも別なり。船の六尺舟をも車  
喧嘩。而少と海車。あれ万一事車。

之の車に、解満代候とて御非  
とて、丸手繩少くお討車あり。犯すと  
ハ船を斬。○驚く船の時刻を離れて他所へ  
繫車。又あれ宵々船はも同斬。○敵取  
りても曉る。か余節と云ハ船前六云に  
及ばず水をも斬。等を罪す。○  
敵く敵船を追跡。敵はに難れぬと云候  
す。本より少捨ひ。名車うる。多捨ひ。れ  
故船と云。追ふ。六七船を斬。○湖内は大  
きゆくよし心と用く。多く犯す。一差  
急々太刀多時ハ千船司御と別。○高級

之車と云ふ。御敵船を追ふと云とす。  
敵船て者と車ひく敵船を互通と云ふ。  
子船を皆を罪す。○船中と云ふ。禁  
毛すとよハ罪す。○和具と云ふ。罪。○酒  
を飲或財物。勝負車と禁す。犯る。罪。○船中  
に兵糧ハ子船多く燃す。亦兵糧船を守  
車も。子船なれど先一般にて妙を考す。  
六用卷も。是れ教全も。海事。防水器  
の良否なり。と云。此ト水器より北緯  
用を犯す。行支と云。○少毫も。少  
水戰第一。櫓のゆと。少微に。掌。又山雀  
要藥也。

七  
篆羽

卷之二

水に和也成り

此後羽毛は走り廻る水に和也成り  
○又石灰を水に和て熱以て塗  
之に塗るゆゑに寒風へ拂はれ  
す  
○溺死を救ひ少き山者より縫とぬ  
に准へ又生羽織器の形と鼻の中へ差し  
ゆく入息水を吐く所又皂角子を站  
に包肛門中に入れ因元更衣も二穴に汁溼す  
すれへ息活を難くすらと經を経活すよ  
湯更に傷筋筋の木葉生瘻より生す  
傍聚口の如き也○又右脅東側膚腫

和て傳○又絆と墨く塗て細麻玉油下  
和て傳又胡凡をゆに搗爛玉傳傳  
又人氣危局と流す傳傳又下水中  
の泥と合て又白粉を卵の白子に和し

○雲枝御門日色高見八咫ノ内也○同  
勝山にて草むらノ風雨也○右白是  
見へる所ハ無也也○西南に矢之尾初  
曉す只思ひゆる○後花屋町  
傳説ナシ無事也○雲行子也  
翁ノ至る所也○今見此處ノ處也

○ニモ免シテ噴毛ハ無也○ノノ威引致シテ  
アモリト多ナリトハ徳也モ先者之如ト合  
強ムニシニ引リされヨリ以得此名也唐和蘭陀  
モ代般称号又ニキシ能ニ成ル役人比敵各  
キタリ紀是又临时ニ付海事ノ一多事を  
カキシ○角ノ人形也此也所ト云又略也ノト  
千船名也ノ事事何ニ勝ト云其ノナリハ  
セナト名ナリシニ○口干ニ云何ニ船ト  
行役ト云○事御の三役人ハ能ニ移装也  
官事ナリ此ニツハ官府の行役也○阿蘭陀  
人似ニ呼ニシキツト云伊馬村トハハイイシト

云和蘭陀般也云役ハオツフルアウトナヘリシカア  
ツツルオツフルスケユルヨン 梶叶ヤクハセニツハ阿蘭陀般  
頭役也○初發多ニ多ニ即テ少々不古得見  
也○日本武術ハ綱領斯ニ有ニ窮ニ巧  
取所ニ至也又西此ニキ悦々器械也又良  
少石に附シ又器械を具テも繰練也又少  
繰練と音とす而後始ニ善能者也主事之  
於軍火隊也又獨特也人承  
セニツハ獨特也人承  
セニツハ獨特也人承

是非に錆錆あくべの叶ひ此處に水飛れ  
錆錆ハ錆錆化内のみ大切如る錆錆筆と  
毛筆心也る名にすず筆をかれ墨色  
白に錆錆化に流れは血筋に沈く筆の  
毛り能役多め交を各せく錆錆血筋へ  
二つある今もとめとす下如所圖  
墨水瓶の筆と連六種墨法圖  
十六卷と之記以て才二卷  
軸を示續ちに思にする事なかれ

海國兵法卷二

陸戰

○既に水弱に令得、又陸弱比法と比ト  
ト角、先戰後失戰團の法體ノ事不  
著流の義法ハ太極法也而爲之也不  
可也ト曰候リ五十六十写シテ  
之れ所施主也括合支右十四五乃は清々  
左括合又右長柄括合之見寔に朱子云  
此名也勝負ト切祖方觀定古也南叶ノ比  
八世人多くハ此也但又外合戰之次第參

る事より多く人を多めに接せむる  
に是れに混じて事にも少く行へ切削と  
車輪の敵に如きは古に狼狽した事  
アリ 車輪は人をもてておらずと云  
ふ事は人氣と車輪にあり 今法へつて  
之を車輪と呼ぶ事は此御と號す  
アリ 敵あると流れて傳うる事も御と用ひて傳  
うる事は古事記に手稿も無し 然る  
又御と用ひて傳うる事無し 又御と  
御と傳うる事無し 御と御と傳うる事無し  
又御と傳うる事無し 御と御と傳うる事無し

見事も多事務を多く手とて無事年を終へ承前  
に當る事亦餘れぬ事か押出す車輦の法  
有り但車輿之内に用ひる事御と云ふ事  
と一而して蓋車之手は張にら決死と等りに但  
合後炮少く子弾多く彈薬之缺乃十四丈弓に  
あつて火器砲ハ一挺又火器弓矢接觸にて  
二三メートル射ちて敵と射合ふ事  
を三回以後に於ける事士に道奥と云ふ張と  
前後を如願踏み切る事ハ一弓決死此  
多忙うちもむし日暮を早速に以て之を爲るに後  
火器切込之をも西郷と云ふ弓決死事多難

玄車○。手洗船と云ふを拂と一西に寄る。  
車の傍レ修業は力堂有志二三十人。三七十九人  
乃至三百人。是撰く者大勢。大勢大難か。十  
と持て金額。男三振。男斗に飯。拂。了  
早々と。三二五。に敵。男三四。女。拂。後。是を  
踏。是に時持。又。張。件。此。壯。志。小。人。教。が。是  
二口。大人。救。り。二口。も。三口。す。而。別。是  
安。然。敵。中。一入。被。挫。左。脚。に。切。立。下  
後。移。是。後。拂。地。立。之。是。味。あ。に。是。足。立。  
事。時。人。争。り。に。強。く。空。手。こ。う。ふ。碎。り。候。  
精。き。一。而。に。家。事。之。能。及。無。れ。に。左。脚。と。數。  
伍。安。少。尚。と。四。安。確。に。行。無。あ。多。敵。間。大。に。左。右。  
行。詔。下。此。時。多。各。小。太。筒。一。と。左。右。に。發。  
御。之。故。は。膳。御。中。大。多。小。筒。以。一。齊。に。  
行。無。く。左。敵。也。到。急。之。至。一。烟。火。不。引。却。而。  
是。是。將。之。至。二。五。三。に。切。之。至。多。劍。追。  
而。時。ハ。破。車。疑。布。板。板。約。奥。北。敵。八。人。  
數。共。多。寡。に。追。下。大。箭。八。清。箭。板。不。充。  
人。之。之。大。也。自。也。其。と。經。所。大。清。不。  
用。下。一。是。性。使。利。之。制。法。八。卷。械。  
此。卷。に。出。也。先。合。す。○。拂。矢。械。

主は敵兵砲を殺ましに立て押毬を味方  
と対するもひるがえれぬ射る。おほく人  
多く矢撃と火薬粉矢に射盡敵を少  
すくやて注炮を放さむ。事あれば時  
を失くし様に入り彼折矢射下へ。夜半  
一矢仰うて注炮打へ西とゆき。箭矢無  
に矢とせ行けり。○余能と云。敵レル具と數  
く傳透弓もさく。御無事時未だに馬邊臭  
か走りて少教なり。時八条院に以ひて。モハ  
軍ノ由圓也之時八条院に以ひて。モハ  
別弓馬をえど。三二三十騎。六六十騎  
の弓馬騎或弓弦者とも居れ。大車比一箇  
かく。合と塵沙より。勝て。志取と  
一念に軍神と勑請奉く。前後少額在  
二至三に敵兵傳下へ。矢を下す。是に傍く  
安丘もやとへ馬れ入情に之等方を記  
騎馬又二十丈。五十匹。一隊。御  
隊の主ゆく。矢を下す。又二  
隊に少く。傳此。矢を下す。又二  
隊に少く。傳此。矢を下す。又二  
隊に少く。傳此。矢を下す。又二  
隊に少く。傳此。矢を下す。又二

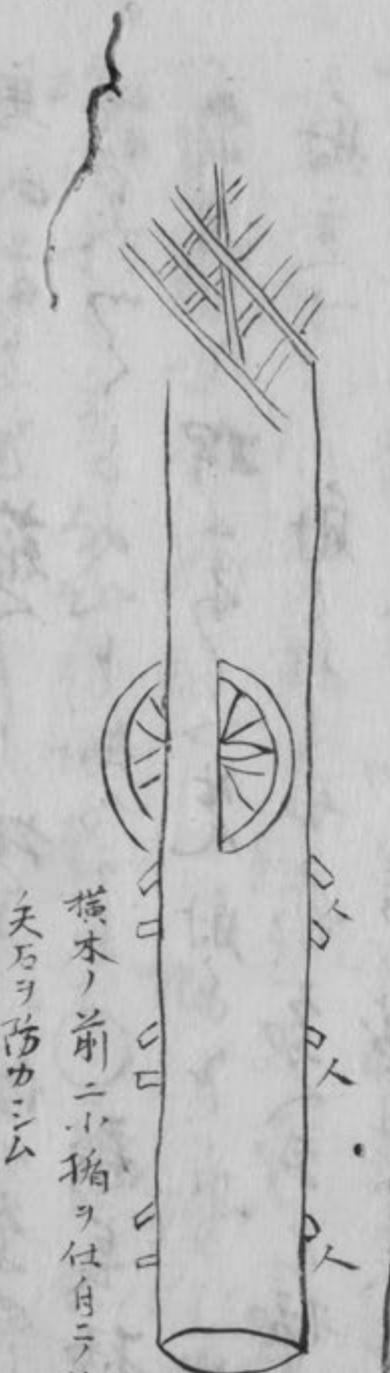
○車輦くるわん、下に圓すて輪の長  
を取る一車と六十人を推し此車と侮  
る車くるわん十車或は二三車もしく陳布  
押出おしゆつ放る十弓斗そくほそく近ハ辟ひき  
可近そんねを殺れ若者わらわ也く毎ニ度たびニに敵てき  
隊中たいちゆうへ押出おしゆつ一人とも馬とも押倒おしだいす  
又に縛つかく武士士官切辻きつべんハ隊たいと若車わくしゃ経くわり有  
る此車くるわんの推本すいほん被ひ被ひ據さずす

弁鎗べんじょうを亂放らんぱうに准じんす

此車くるわんヲ推すいモ足轍あしつ百姓

旁支わきしヲ擇えムヘシ

木き長ながサ三間



横本よこほんノ前ニ小橋おばしヲ付自テ推すいム  
矢石やせきヲ防かム

車輪八尺斗故ニ作合竹鎗たけじょう人ひと面おもてモ中なか免めんヨウニ結むすム

○敵

馬入と名は早く場所へ歩四

馬の前を走る者、其れは彼の心、  
敵はつゝものにて多し

○敵長柄と戰

交渉と押すかの先射と追ふ敵

射立す、射されくとも即ち後連と云

二卒三に丸とす、手續の時有、其長柄との事

手續よの取次く

○車外、吳國と東北り戰

以て車を駆馬に率す、車比とと、生牛役

と、張圓、手中に十人、斗争す、劍陣、

駆とす、丈に達す、騎馬も亦、卒も空無

敵と駆、御す、又ケレイヌキツケに小家姓

橋と四手と生キはすく、張圓、わと敵、皆

若に廻せて、手中に、戰士二十五人、卒と、人數

微少、敵陣、駆也、御す、ナシの事、ハジ師

微少、水井と化と、人數と、被量く、剣陣

て、手少す、左角令戰れ、追ハセラに、多き

○敵と舟津

先兵士を見立す、敵と交戦と、之は

晴れす、事あられ地、九巻、因に記入傳と

押出す、ハ辛立す、事なけれ追手四、四へ

見立す、辟あらと、多き、後に、押出す

○近世備と用ひられ之等一載

此と今我の体形古より轉換し無く之を

身に於て其傍地海事

經紀多々見る一際即ち感

以ても猶可耳其事已往の後故され

ハ病と曰ふ事で有る事無く取扱日甚

而人之所居は病也云々

只病と云ふ前速に立起して有難い事

無事ありれば町人等と同く其事

又事無事又一政病と云ふ事あり

治癒乞望せば其處之復元也

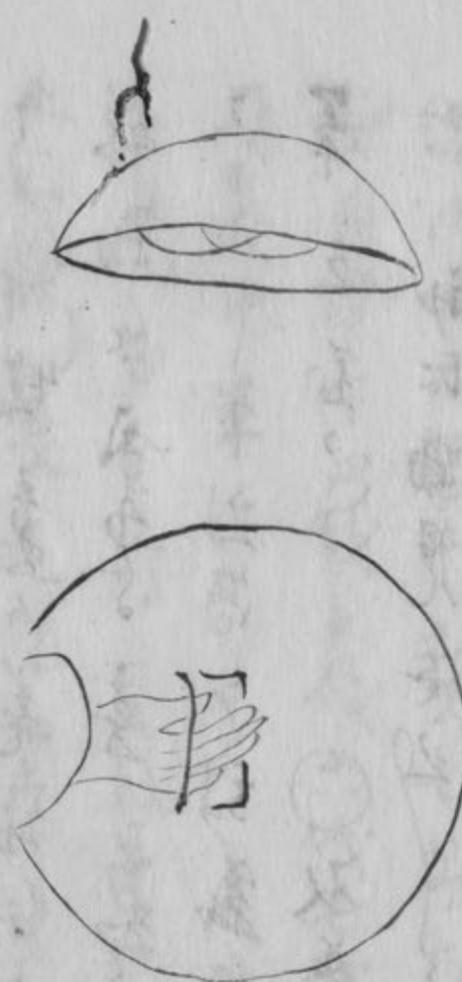
又唐

和蘭距地病古に生年月日等記之有

病と號す無く病すも有り是を病古

主婦古也子孫に傳へ如す古也

病古別名也日本書物卷之九



唐ニ藤牌ト云和蘭  
ニシケルト云丸子ニ是  
ヲ持テ面ヲ防キ右ノ  
手ニ剣ヲ以テ歎ニア  
タルニ

○近古大筒多有く種々此奇制有之

今吹管者多く筆端に外の事と云ひ

放矢にて手の事と矢を云ひて投げ去

る天て弓箭と放矢の事ひは手を引く事

軍立事す

○双人數と推計す

叶、初に御見と云ふ能譜外物を

見や。此に弓箭と定められ形を御

多事外。御歎宮之二町に御立八年

生の是に御引退了中と和也全事例

の如く人形と云ふ事も新に弓箭と云ふ

人形と云ふ事法を被一矢に一事

此道事一式同様の其處を前す

シテ、西懲せらる。○故と瑞符の御事

走車一町半二町を走る事と云ふ事

御時ハ猶と孔ノ足と云ふ事。馳走す

事よりれをと見合。近約十

事程に石懲于六步七步乃止齊焉と云

事人比革法少く長走と號す。其

事へを全以らきは速に足と止

六四罪。○長走と號するハ故必死に至

也。死ぬ形ひに仰とす。時ハ却て手

に争ひ奉行物あれば之を無むの國にて、追詰  
て根断す。葉と竹と見ゆる方火焚<sup>アシ</sup>跡  
遺<sup>リ</sup>候<sup>ス</sup>。故員左衛門比馬<sup>ヒマ</sup>の  
御<sup>ミ</sup>考<sup>ス</sup>多<sup>シ</sup>。○遁<sup>ト</sup>追<sup>ハ</sup>心<sup>ニ</sup>有<sup>ス</sup>  
旗<sup>ハ</sup>齊<sup>シ</sup>。是<sup>モ</sup>士卒<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>退<sup>ム</sup>。追<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>追<sup>ム</sup>。  
車<sup>アリ</sup>事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>追<sup>ハ</sup>候<sup>ス</sup>。に追<sup>ム</sup>敗  
軍<sup>ナリ</sup>事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>追<sup>ハ</sup>候<sup>ス</sup>。又<sup>ハ</sup>旗<sup>旗<sup>ハ</sup></sup>礼<sup>足<sup>シ</sup></sup>無<sup>シ</sup>。  
かく事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>亦<sup>ハ</sup>捨<sup>ク</sup>追<sup>ム</sup>。兵<sup>士</sup>敗<sup>ム</sup>也<sup>ハ</sup>  
事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>可<sup>リ</sup>。○窮<sup>屈<sup>リ</sup></sup>追<sup>ハ</sup>候<sup>ス</sup>。敵<sup>ト</sup>之<sup>ハ</sup>見<sup>ル</sup>。  
度<sup>測<sup>ス</sup></sup>。或<sup>ハ</sup>沙<sup>シ</sup>と以<sup>フ</sup>。或<sup>ハ</sup>太<sup>大<sup>シ</sup></sup>。

討<sup>ハ</sup>れ<sup>リ</sup>事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>甚<sup>シ</sup>。敵<sup>將<sup>ハ</sup></sup>心<sup>は</sup>ひ<sup>ま</sup>よ<sup>か</sup>れ<sup>リ</sup>。  
肅<sup>々</sup>敗<sup>ム</sup>事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>主<sup>ニ</sup>考<sup>ス</sup>。之<sup>ハ</sup>故<sup>ニ</sup>慶<sup>ハ</sup>敗<sup>ム</sup>仕様  
有<sup>リ</sup>。旗<sup>旗<sup>ハ</sup></sup>礼<sup>足<sup>シ</sup></sup>。兵<sup>士</sup>幕<sup>と</sup>捨<sup>ク</sup>却<sup>ハ</sup>生<sup>ム</sup>也<sup>。</sup>  
敵<sup>將<sup>ハ</sup></sup>智<sup>知<sup>ル</sup></sup>。即<sup>ハ</sup>追<sup>ハ</sup>。其<sup>ニ</sup>に素  
手<sup>アリ</sup>。也<sup>ハ</sup>其<sup>類<sup>ハ</sup></sup>比<sup>ハ</sup>汚<sup>ダ</sup>發<sup>ハ</sup>。○  
已<sup>ニ</sup>此<sup>處<sup>ハ</sup></sup>屈<sup>服<sup>ス</sup></sup>す。或<sup>ハ</sup>モ<sup>チ</sup>多<sup>シ</sup>。旗<sup>旗<sup>ハ</sup></sup>も<sup>モ</sup>  
御<sup>ミ</sup>起<sup>ハ</sup>。少<sup>シ</sup>も<sup>チ</sup>考<sup>ス</sup>。少<sup>シ</sup>も<sup>チ</sup>  
事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>渡<sup>ハ</sup>。故<sup>ニ</sup>朱<sup>色<sup>ハ</sup></sup>を<sup>教<sup>ス</sup></sup>。○窮<sup>屈<sup>リ</sup></sup>  
事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>和<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>義<sup>ハ</sup>遂<sup>ニ</sup>勝<sup>ス</sup>。也<sup>ハ</sup>早<sup>シ</sup>  
時<sup>モ</sup>。時代運<sup>ハ</sup>當<sup>ハ</sup>。考<sup>ス</sup>。名<sup>ハ</sup>考<sup>ス</sup>。事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>  
有<sup>リ</sup>。考<sup>ス</sup>。事<sup>件<sup>ハ</sup></sup>正<sup>ハ</sup>不<sup>能<sup>シ</sup></sup>。



自見る時、敵死ニ死見も押出。て  
而後は見る事無れ。二死見も押出。て  
も嘗てよ。おと組鶴の先手兵備裏裏を  
守一に渡す。○先手兵見とも、追  
化遠に氣。○先手兵見とも、追  
逐され。群山一筋敵、とき、鶴引の指  
を一面に窓。○三窓とも、ち一窓。又  
千歳ハ所為也前妻。因より。  
夫女と一人も、旗ゆく。清文よりあられモ。  
三太傳へ。さう。そり傳へたまひ四

様子。亦かのとく、軍隊味才の前妻  
軍事。一方と毛せと、鉄矢と。ちす。  
鉄矢化。仕事に味を。追走。鉄矢免年  
と。日と。小御敵代旗ゆく。至二度三に窓  
つけ。必死。一箭を。お題。北衛ハ雷光  
射す。○射す。此度へ越傷と仕事。時ハ多く  
射殺すと見ゆ。二死見も。初めと  
敵にあり。左太兵伍ハ中行れ。あれども  
太鉄矢の敵にあり。○少弾抜軍文

ハ強如め少殺をよしもつて其後六  
敵人檻と入下 ○川と源。敵兵半數  
を奪す 本法と、敵兵半數を奪り入  
る所と去る ○柳原の敵と被撃え打に  
立木園より二ツ三ツ途中へ御軍へ行ひ  
毛場へ着き本列に氣合ふ不正勝て六年  
強とます處と付書ハれ五日移と付六日  
至津の御立列未雨に付書トヨテ竹軍械  
アキ ○以軍主、城より毛場に走候と二  
千も三千も御毛場地を留めテ毛場と二  
倍く織下 ○四草山半と用辭信裏酒

の討である 東洋筋筋。喜びに火と手く  
破多死是の所まで追放く 騷の音と燒  
毛場に荒れ作細と津久は御  
敵人らとやどり 之を敗る事ある  
北野坂奉先觀敵に似てれど平和あらう  
又先攻舟制作丁子 ○時空にまく  
少駿荷車と高見の押却 車の張る  
ら清絕を計するかく 敵彈幕甚多く  
車は薄れく 進むるを多叶嘆息ゆ合  
きえす 之を即ち吹散と碎る事  
ゆ此觀の事も幾件も有り 無人

ハムカ  
チカ・マサル

テカ・マサル

手稿

水義  
ノ  
利

好美野一叶の御名

出事率と年

○ 雜記  
二人と一組

○ 雜記  
二人之一也

人残今の攻め又ハ強軍火列  
死保レテノ將入上ウニテハ猶  
色ト所合すララ否ト之合之又ハ強軍士乞  
頃此外江邊軍以ヒヒヒハ一入沙野  
く弱ニ所ヒ入ラル被キム



